
しおさいの時刻

長瀬美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しおさいの時刻

【Nコード】

N3799D

【作者名】

長瀬美樹

【あらすじ】

北南大学ミステリー研究部の部長を務める三年生の小出貴美恵と、その前部長で四年生の七尾一朗は、鍵をかけた筈の部室で七尾宛の手紙と不審な機械を発見した。手紙には七尾宛の挑戦状と、銚子までの切符や宿泊クーポンが封入されていた。二人は挑戦状に書かれた内容に添って銚子電鉄の沿線周辺を調べまわり、謎を解き明かす事に成功、指定した場所に埋められていた『プレゼント』を掘り当てた。だが、そこに埋められていたものは…

ブローグ

晴れ渡ってはいても、太陽が出る直前の空はまだ薄暗い。ましてそれほど巨木が無いとはいえ、うつそうとした林の中では夜明けの僅かな光も遮られてしまう…そんな見通しの悪い木々の間を進み入る者がいた。左手にシャベルを持ち、携帯式のクーラーボックスを背負ったその者は、小さな懐中電灯で足元を照らしつつ、周囲の様子を気にしながら、林の中で僅かに開けた場所にたどり着き、ゆつくりと周囲を見回した。

「……………」

何かに納得した様にうなずいた後、その人物は、木の葉に埋もれた地面の一点を、持っていたシャベルで掘り始めた。柔らかな腐葉土は、それほど時間もかからず掘り起こされ、背負っていたクーラーボックスを埋めるのに十分な大きさの穴を穿つ事が出来た。

穴にクーラーボックスを置き、それを隠す様に埋め戻した後、その人物は上着のポケットから何かの機械を取り出し、手の中で何かを調整する様な仕草をした後、縁の部分に突起したスイッチを押した。その途端、機械は小さなビープ音と共に幾つか並んだLEDを点滅させ始めた。

「……………これで、よし」

満足そうな笑みを浮かべながら、その人物はもう一度機械のスイッチを押した。ビープ音とLEDの点滅が止んだ事を確認したその人物は、機械をポケットに入れ、その場を離れて行った…

第一話

北南大学のキャンパスは、都心から私鉄東洋線の特別快速で約一時間ほどの郊外に位置している。

元々は教養学部：つまり一／二年生の為の施設であり、三／四年生と短大生は都心のキャンパスを使っていたが、少子化のあおりで北南大学も学生の数が次第に減り、数年前に全学生が郊外のキャンパスを使用する事になった。交通の便の悪さを不満に思う学生は多かったが、学舎のデザインや居住性はそれほど不評ではなかった：ややセレブ趣味とは言われていたが。

その学舎の一角に、クラブ活動のための部室が整然と並んでいる区画があり、時間によっては講義以上に頻繁に学生達が入り出していた。ただしその日は前期試験の最終日であり、国文学部三年生でつい先週からミステリー研究部の部長を務める事になった小出貴美恵が、最終課目である『近代文学史』を終えて部室の前まで来た時、その区画には人影はほとんど無かった。

管理していた鍵でドアを開けて部室に入った小出貴美恵は、部屋の中央のテーブルに無造作に置かれた紙袋に目をとめた。

「あれ、何だろう？」

何のへんてつも無い手提げ式の白い紙袋に近づきながら、小出貴美恵は首をかしげた。

「誰かの忘れ物かな：でも、昨日最後に部室を出る時には無かったよね…」

「どうかしたのか？」

不意に背後から声をかけられた小出貴美恵は、それまでより明確に華やいだ表情を浮かべながら、声の主がいる方向に振り向いた。

「あ、部長、おはようございます。」

小出貴美恵が部長と呼びかけた相手は、七尾一朗という、同じ国文学部の四年生だった。

「部長は君だろうか？」

「あ、そうでした。ついクセで…」

「まあ引継ぎをしてからまだ一週間しか経ってないし、仕方が無いとは思うけど。」

「ところで、七尾さんも今日は試験だったんですか？」

「ああ、午後に一科目だけ。午前中は内定の出ている印刷会社に行ってたんだ。」

「就職するんですか？ 小説家としてデビューしてるのに…」

「短編が何本か雑誌に載った程度で喰っていける訳ないって。まあ、もちろん今後も創作は続けるけど、当分は会社務めをしながら、色々書き溜めていくつもりなんだ。」

「んー、やっぱり現実は厳しいんですね。でも生活の安定は確かに必要だと思います。そうでなければ結婚も出来ませんし。そもそも女の子と付き合うのだって、ある程度の経済力は…いえ、恋愛と金銭を同じ次元で語るのは不適切かも知れませんが、長いスパンでしっかりとした関係を築くのに、生活設計をないがしろにする事は出来ないでしょうから…」

「ところで、さっきはなぜ首をかしげてた訳？」

「え…あ、ああ、実はあんなものが…」

小出貴美恵が指差した先にある紙袋を見た七尾一郎は、小出貴美恵と同じ様に不審の面持ちを浮かべながら紙袋に近づき、警戒した様子で上の口から中を覗き込んだ。

「誰のものか分からないのか。中を見て構わないかな？」

「そうですね、封がしてある訳じゃありませんし。」

七尾は紙袋の口を広げて中身を取り出した。角型六号というやや大きめの封筒を使った一通の封書と、一辺が十五センチ程の箱がひとつ入っていた。封書に書かれた宛名を読んだ七尾の顔に、不審の表情が浮かんだ。

「北南大学ミステリー研究部元部長・七尾一郎様…」

「なんだ、七尾さん宛てですか。」

「うん、そうらしいけど…でも誰が置いたんだ？ 昨夜、君が部屋を出て戸締りをした時、ここには無かった訳だろう？」

小出貴美恵に浮かんた不審な面持ちもまた、七尾一朗のそれと同質のものだった。

「昨日の夜から、さつきあたしが部屋の鍵を開けるまでの間に、誰かが部屋に入ってこれを置いた…という事ですよね。」

手に持っていたままの鍵をみつめながら、小出貴美恵は気味が悪そうにつぶやいた。

「開けても構わないだろうな？」

「ええまあ、明確に七尾さん宛てですから…でも気をつけて下さいね。」

その言葉とは裏腹に、小出貴美恵の表情は『さつさと開ける』と言わんばかりの好奇心に満ちていた。微かに笑みを浮かべながら無言で首肯した七尾一朗は、部屋の片隅に置かれた事務机の引き出しからハサミを出して、中身を切らない様に慎重に封書の上端を切り取った。

「何だ、これ？」

テーブルに広げられた中身を見ながら、二人はまた首をかしげた。印字されたP P C用紙が二枚、それに加えて何かのクーポン券が入っていた。七尾一朗は印字されたP P C用紙を手に取り、その文章を読み上げた。

「えーと…北南大学ミステリー研究部・七尾一朗様。貴兄の作品をいつも拝読させて頂いている一ファンです。先ごろ掲載された『クリムゾンの目覚め』も、とても良い出来でした。ただ、序盤の伏線に少し無理があると感じましたが…」

脇で聞いていた小出貴美恵が、少し眉をひそめた。

「さて、貴兄がこの度、ミステリー研究部部长を引退なさると聞き、是非ともプレゼントを贈らせて頂きたく、この手紙を差し上げた次第です。しかしながら、ただお渡しするのでは面白くありません。そこで、ひとつゲームをやってみませんか。この手紙に同封したい

くつかのヒントを解き、プレゼントがある場所を突き止めて頂きたいのです。もちろん、お受け頂くかどうかは貴兄次第です。貴兄には推理作家としてのプライドと好奇心がある、というわたしの考えが間違っていない事を祈ります。一ファンより…」

「また随分と『上から目線』の文面ですね。とてもファンレターとは思えませんけど。」

「確かに、どちらかといえば『挑戦状』だが…で、ヒントというのはこれか。」

七尾一朗は二枚目の紙に視線を走らせた。

「プレゼントは、ここでお受け取り下さい。犬吠駅は一時。君ヶ浜駅は五時。灯台は十時…何故三箇所も書いてあるんだ？ それにこの駅名は…」

「あ、最初の二つは銚子電鉄の駅です。そこから考えると、灯台というのは銚子電鉄沿線にある犬吠埼灯台の事じゃないかと思えますけど。」

「…銚子？」

七尾一朗が発した短い返答には、疑問とは別の微粒子が混入されていた。

「何か思い当たる事でも？」

「いや、そうじゃ無いんだけど…それにしても、よく知ってるね。」

「あ、ご存知ありませんか？ ここしばらく、インターネットの掲示板やマスコミで話題になってるんです。経営不振に陥った銚子電鉄が、ホームページに『濡れ煎餅を買ってください。電車修理代を稼がなくちゃいけないんです』と載せたんですよ。濡れ煎餅というのは銚子電鉄の副業だそうですが…そうしたらそれが大評判になって、今では通信販売も滞る程売れまくってるそうです。」

「なるほどね…」

小出貴美恵の説明を半ば受け流しながら、七尾一朗はクーポン券を取り、印字された内容に視線を走らせた。

「これは、切符みたいだな。」

「そうですね。JRの乗車券と特急券：それとこっちは宿泊クーポンですね。七尾さんの名前で申し込まれています。」

横から覗き込んだ小出貴美恵が、さらに詳細な情報を口にした。

「東京都二十三区内と銚子間の往復切符、特急『しおさい』の指定席券：往路が明日で復路が明後日です。それと銚子市内のホテルの明日チエックインの宿泊クーポン。それぞれ六人分が、料金支払済みで予約されてます。」

「六人分：ミステリー研究部全員分という事か？ また随分と大盤振る舞いだな。」

「そうですね。このホテルならどう見積もっても一人一泊一万円は下らないでしょうし……」

「ところで、これは何だろう？」

最後に残った箱から七尾一郎が取り出した中身を目にして、小出貴美恵は再び好奇心に満ちた表情を浮かべた。やや粗雑な作りの、手のひらに乗る位の大きさの機械だった。表面には、現在は点いていない幾つかのLEDがはめ込まれ、その他にもスイッチらしい幾つかの突起が存在した。

「小型のラジオみたいな雰囲気だけど、具体的に何なのかはよく分からないな。どうみても自作っぽいし……」

「七尾さん、機械の裏に何か書いてありますよ」

小出貴美恵に指摘された七尾一郎は、手に持っていた機械を裏返した。数センチ四方の紙が貼り付けられており、短いメモが印字されていた。

「えーと……ビーコン受信機。有効範囲は発信源から半径五十メートル以内。」

「ビーコンって……えーと、つまり……『プレゼント』の在り処に近づいたら、これが誘導用の電波を受信して教えてくれるという事でしょいか。なんか、異様に手が込んでますね。」

「……………」

「どうするんですか？ 中身からして相手が冗談でやってると思

えませんが、それはそれで何か気味が悪いという感じもしますし……」

「そう言ってる割には、随分と乗り気な様子だな。」

「そ、それはまあ、旅行は大好きですし、さっき言った銚子電鉄の事もあって、銚子には一度行ってみたいな、とは思ってたんですよ。観光地として凄く良い所だそうですし、明日と明後日はあたしは何も予定がありませんし、それに……」

「それに？」

「それに、七尾さんや、部のみんなと旅行が出来るのは、やっぱり嬉しいですよ。」

「うん……まあ確かにそうだな。秋になれば、俺が部に顔を出す機会も殆ど無くなるし。」

「……そうですよね。」

小出貴美恵の表情に一瞬だけ陰りが浮かんだが、手紙を読み直している七尾一朗はそれには気がつかなかった。

「いずれにしても、こんな風に挑戦されて逃げるのは嫌だからな。」

俺も、明日と明後日は特に予定は無いから行く事にする。後は今日みんなが集まった時点で予定を聞いてみよう。」

第二話

「…という訳なんだけど、みんなどうする？」

七尾一朗と小出貴美恵を含めて総勢六名の部員が一堂に会したのは、それから二十分後の事だった。後から到着した男女各二名の部員たちは、興味だけは間違いなく感じている態度を表していたものの、返答の内容は別だった。

「行きたいんですけど、実は俺、今夜からバイトなんです。シフトが決まってるんで、キャンセルのしようが無いんです。」

「あたしも、明日には北海道に帰省するんで…」

一年生の幹啓治と二年生の滝沢雅美は、無念そうな面持ちでそう言った。しかし四年生の高宮浩子は、どちらかといえば余裕を感じる様な態度だった。

「悪いけど、あたしと二宮くんもバイトの予定があるからパスさせてもらうわ。」

「え？」

隣に座っていた三年生の二宮和之が、驚いたような表情で高宮浩子に振り向いた。

「え、じゃ無いでしょ。あんた昨日の打ち合わせを覚えてないの？」

他の人には気が付かない程度の目くばせをされた二宮和之は、数瞬の戸惑いを浮かべた後、不意に何かを思い出した様な表情になった。

「あ…ああ、そうでした。すみません、忘れてました。」

頭を掻きながら取り繕う様に追従した二宮和之の様子に、七尾一朗も小出貴美恵もやや不審の面持ちを浮かべたが、それ以上の追及は行われなかった。

「そうか、じゃあ仕方無いな。俺と小出君だけで行ってくるよ。まあ、おそらく大した問題は無いと思うが、それでも何かあった場合は後で報告する。」

部会が終了して七尾が退室した後、高宮浩子は小出貴美恵に近づき、小声で囁いた。

「まったく、二宮も気が利かないわよね。あの程度の洞察力と判断力で、よくミステリー研究部なんかに在籍してると思うわ。」

「……それじゃ高宮先輩、もしかして……」

「貴女が七尾の事をどう想ってるかぐらい、部員はみんな気がついてるわよ。おそらく七尾以外はね。」

薄く塗られたファンデーションに覆われた頬の温度が僅かに上昇する事を自覚した小出貴美恵は、返答しようが無い様子で、今さら分析の必要も無さそうな部室の建築構造を確認する様に、視線をそこらじゅうにさ迷わせた。

「あたし達四年生は、もう来年の春には卒業する。気持ちを伝える時間は、それほど残されてないわよ。」

「で、でも……七尾さんは、あたしの事なんか眼中に無いみたいです……今回だって、平気で二人で行くなんて言ってるのは、おそらくあたしとどうにかなる、なんて思ってもいないからじゃないですか？」

「仮にそうだとしても……いえ、そうだとしたら尚さら今回の旅行で状況を変えるべきなんじゃないの？」

「……………」

「しっかりしなさいよ。あたしが見たところ、七尾は貴女が眼中に無いなんて事は決して無い。ただ彼は恋愛そのものに少し不信を抱いているから、貴女と友達以上の関係になるのを無意識の内に避けているだけの事。」

「不信？」

高宮浩子が使った言葉のひとつが、小出貴美恵の聴覚に絡みついた。問い返された高宮浩子も僅かに渋面を作った。

「いえ、それはあたしが言う事では無いわね……とにかく、もし貴女が本当に七尾の事を想っているのなら、貴女の方から迫らないと可能性は限りなく低いと思うわ。」

「で、でも、あたしは……」

「まあ、あくまでも極論だけど、そこまで考えておいた方がいいって事。よく覚えておいて。あ、それともうひとつ…」

「はい？」

「お土産の濡れ煎餅は忘れないでよ。こっちじゃなかなか買えないんだから。」

第三話

翌日：七尾一郎と小出貴美恵の二人が、送られて来た指定席特急券を使って『しおさい三号』でＪＲ銚子駅に到着したのは、昼少し前の事だった。進行方向一番左のホームに降り立った二人は、初めて来た銚子駅の構造が分からず、困惑した様子で周囲を見回した。

「さて、ここから銚子電鉄に乗るには、どうしたらいいんだろう？」

「そうですね、乗り場というか銚子電鉄の駅がどこにあるのかよく分からないんですけど……とりあえず改札口に行ってみませんか。」

車両編成前方付近の改札口まで来た二人は、進行方向右側の有人改札口にいた駅員に銚子電鉄の乗り場の所在を尋ねた。

「ああ、それならこの改札を出ないで、あの高架を渡って隣のホームに行つて下さい。」

「え、あっちのホームに銚子電鉄が来るんですか？」

「いえ、ホームが銚子電鉄の乗り場と繋がつてるんですよ。高架を降りたら先端に向かって進んでください。」

もうひとつ要領を得ない二人は言われるまま高架を渡り、隣のホームに降り立って先端に向かった。二人はそこでようやく銚子電鉄の駅舎と対面した。とんがり屋根とアーチ型の出入り口が印象的なこの建物のデザインは、利便性や合理性とは異なる思考原理の元に生み出されたに違いない……それが二人が得た共通認識だった。駅舎の向こう側には車両が一両停車していた。明るい青に色々な絵が描かれた車両で、先頭部に一〇〇一という番号が記されていた。

「七尾さん。あれ、確かどこかのゲーム会社が宣伝契約をしてラッピングしたっていう車両ですよ。これ乗りたかったんだ。」

「だけど、切符はどこで買うんだ？ 駅舎の窓口は閉まつてるし。」

戸惑った様子でそう呟いた七尾一郎だったが、車両のドア付近にいる乗務員らしい人物が自分達を手招きしている事に気がついた。招かれるまま車両に近づいた二人は、その乗務員が切符の販売係も

兼ねている事を知った。一人六二〇円の一日乗車券を買って一〇〇一に乗り込んだ二人は、空いた席に座って小さくため息を突いた。「さて、とりあえず銚子電鉄に乗る所までは来たけど、これからどうするかだな。」

「そうですね。とりあえずは手紙に書かれた駅から調べてみませんか？」

「君ヶ浜駅と犬吠駅か…それにしてもなぜ二箇所…いや、灯台を含めて三箇所なんだろう。それに、各場所に付記されたこの時刻は何を意味してるんだ？」

「とりあえず思い付いた事なんですけど…」

隣に座って手紙を覗き込んでいた小出貴美恵が、それほど自信は無い様子で意見を述べ始めた。

「その時刻にその場所にいると、発信機を持った誰かが通りかかって、あたしたちがその人を特定すると正解と認められてプレゼントを渡してくれる、というのはどうですか？」

「なるほど、理屈としては成立するな。ただ、俺の小説の伏線作りを批判するようなやつにしては、少し安易な設定だと思うんだけど。」

「まあ、確かにそれは言えますね…」

やや消沈した様子の小出貴美恵に対し、七尾一郎はさらに意見を述べた。

「でもまあ、他にいいアイデアも無いし、とりあえず時刻が一番近い犬吠駅に行ってみよう。何も起きなければ、そこで改めて考えればいい。」

そう結論した瞬間に車両のドアが閉まり、一〇〇一はゆっくりと動き始めた。都心の通勤列車には無い独特の横揺れを感じながら、二人は初めて見る銚子電鉄沿線の風景を満喫した。十七分後、一〇〇一は犬吠駅に到着した。進行方向に向かって左側のドアからホームに降り立った二人は、改札口を通って駅舎に入った。出入り口に向かって右側に売店があり、色々な種類のぬれ煎餅の袋が積み上げ

られていた。

「あ、ここで売ってるんですね。えーと、いくつ買えばいいのかな…」

「今買うのか？ そんなにたくさん買うと荷物になるだろう。」

「そうなんですけど、聞いた話だと売り切れてて買えない時があるんですよ。買い逃すのだけは避けたいですからね。」

「やれやれ…」

購入した濡れ煎餅の量は、二人の両手が塞がる程のものだった。

さすがにこの状態では動きが取れないという判断から店で宅配便を手配してもらい、伝票を書いて荷物を預けた。駅の近くにあるレストランで昼食を摂り、再び犬吠駅の駅前広場に戻った時、時計は午後一時五分前を示していた。ビーコンの受信機を荷物から出した七尾一朗は、縁にある電源スイッチをオンにした。

「あと五分か。果たしてどうなるかな…」

「七尾さん、一枚いかがですか？」

振り向くと、小出貴美恵が手に持ったぬれ煎餅を差し出していた。透明な袋では無く紙に半分包まれていて、微かに湯気が立っている。

「これ、焼きたてなんです。ちょうど今売店で焼いてたんですよ。一旦さめた濡れ煎餅には無い独特の味わいがあるんですけど、当然ながら現地でしか食べられないんです。」

「今しがた昼食を済ませたばかりなのに、また煎餅？ 何か凄いな…」

「えー、お菓子は別腹ですよお。」

「あ、そう…」

肩をすくめた様子ながら、七尾一朗は焼きたての濡れ煎餅を口にした。

「…うまい。」

「ですよねえ。この食感はちょっと他には無いと思いませんか。あー、やっぱり来て良かった。」

時計が一時を指したのはその時だった。七尾一朗が腕時計を小出

貴美恵に示すと、小出貴美恵も煎餅をほおばりながら無言でうなずき、ともにビーコンの受信機をじっと見つめ続けた。

「……………何も入って来ませんね……………」

「うん……………」

さらに数分間、二人は何かを聞き逃すまいとした。機械が正常に動いているかどうかを疑い、電源のスイッチを何度かオン／オフにしてみたが、やはり受信機からは何も聞こえなかった。さらに四時間後、午後五時になって君ヶ浜駅でも試してみたが、結果は同じだった。

「だめか……………」

「そうですね。やはり何か別の解き方が必要なのかも知れません。」

「とは言っても、どう解けばいいのか……………とにかく、午後十時になったら犬吠埼灯台に行ってみよう。」

その提案にうなずいた小出貴美恵は、しかし不意に怪訝そうな表情を浮かべた。

「そういえば、午後十時って灯台のところに行けるんですかね？」

「いくら何でも観光の時刻としては少し遅いと思うんですけど。」

「ああ、そういえば……………一旦犬吠まで戻ってパンフレットでも探してみるか。」

次に来た外川行きに乗って犬吠駅まで戻った二人は、駅の案内所で手に入るパンフレットの中から、近辺の観光スポット案内を見つければ、犬吠埼灯台の概要を調べてみた。

「あつた。これによると……………いわゆる営業時刻というのは、午前八時半から午後四時までだな。」

「営業時刻？」

「ようするに、その間は灯台に昇ったり敷地内の資料館に入ったりする事が出来るという事だ。まあ、確かに夜間じゃ昇っても景色を楽しめるとは思えないし、第一いくら何でも物騒だしな。」

「という事は、やはり午後十時に行っても見込みはなさそうですね。」

「そうだな。犬吠駅や君ヶ浜駅と同じく空振りしそうな予感がする… 仮に行くとしても、明日の午前十時の方がいいだろうし…」

そう呟いた後、七尾一朗はパンフレットを見つめながらしばし思いを巡らせる様な表情を浮かべていたが、やがて小さくかぶりを振った。

「今日はもうホテルにチェックインしよう。歩き回って疲れたし、鋭気を養ってからもう一度考え直した方がよさそうだ。」

「はい、あたしもその案に賛成です… あの…」

「ん、何？」

「… いいホテルみたいですから、泊まるのが楽しみだったんですよ。」

「そうらしいな。天然温泉もあるみたいだし。」

「温泉… そうですね。大浴場でゆっくりすれば疲れも取れると思います。」

「… ああ、そうだな…」

どこことなくかみ合わない会話を交わした後、二人は犬吠駅から海に向かって歩き、数分ほど先にある海岸沿いのホテルにチェックインした。

第四話

元々男女三人が泊まるという予約だったため、部屋は三丁四人用が二部屋用意されていた。二人は別々の部屋に通され、夕食も各自の部屋に運ばれたため、広い部屋の真ん中で一人座って高級海鮮料理をついばむはめとなった。

自分自身の姿が傍からどう見えるかを想像した小出貴美恵は、先ほど着替えたホテル備え付けの浴衣の襟元を直しながら、居心地の悪さに辟易した表情を浮かべた。部屋の入り口に設置されたチャイムが鳴ったのはその時だった。

「どなたですか？」ドア越しに尋ねた小出貴美恵の耳に、半ば予想した声が届いた。

「俺だよ。ちよつといい？」

「え、七尾さん…ちよ、ちよつと待つてください。」

洗面台に行つて一瞬だけ鏡を見てから、小出貴美恵はドアを開けた。手にパンフレットの様な紙片を持った七尾一朗が、先ほどより何となく確固とした印象を受けるような態度で立っていた。

「あ、あの、何でしょうか？」

「聞いて欲しい事があるんだけど、入っていいかな？」

「え…は、はい、どうぞ。」

微かに上ずった声でそう返答しながら、小出貴美恵は七尾一朗を部屋に招き入れた。中央のテーブルはまだ夕食の料理が片付けられていないため、窓際に置かれた椅子に座る様に勧めた。

「えーと、日本茶でいいですか。それとも冷蔵庫からビールでも…」

「いや、構わないでくれ。それよりも大事な話があるんだ。そこにかけて。」

向かい合わせに置かれた椅子を指差しながら、七尾一朗はやや急いた口調で言った。戸惑いの表情を浮かべながら、小出貴美恵は言われた通りに着席した。浴衣の襟元や裾が乱れていないかを気にし

ながら、小出貴美恵は七尾一朗が何を言い出すのかを待った。

「実はこのヒントだけど、ある事に気がついたんだ。」

七尾一朗は、二人の間に置かれたテーブルに、例の手紙を置いた。今日、灯台を除く二箇所に行つて指定された時刻で待っていた。だが空振りに終わつた。おそらく君の言う通り、何か別の解き方があると思つて色々と考えてみたんだ。すると、このヒントの中に感じていた不自然さが、実は解き方を教えてくれていた事に気がついた。」

七尾一朗の言葉は確信に満ちていた。少なくとも小出貴美恵にはそう思えた。

「不自然と感じたのは二点。まず、何故三箇所も場所が書かれているのか。そしてこの時刻には何故『午前』／『午後』という指定がなされていないのか。」

「七尾さんは、場所が複数あるのはおかしい、というのは最初から言つてましたね。」

「ああ。それと時刻だが、俺は銚子電鉄や犬吠崎灯台の営業時間から一時と五時が午後、十時は午前だと決め付けていた。だが、そうでは無いとしたら？」

「……………」

「つまり、この『一時／五時／十時』には『午前／午後』が『書かれていない』のではなく、そんな『分類』は初めから存在しないんじゃないかという事だよ。『一時／五時／十時』という言い方だけで『時刻』では無いもの……」

一旦言葉を切つた七尾一朗の視線の先に、何かに気がついた表情を浮かべた小出貴美恵がいた。

「方向……」

七尾一朗はやや大げさに首肯し、手に持っていたパンフレット状の紙をテーブルに広げた。それは犬吠崎灯台の周辺地図だった。ただし、観光案内パンフレットによく使用されている略図ではなく、正確な地理が把握出来るタイプのものだった。

「今しがたフロント横の売店に行つて買つてきたんだが、これを使つて確認してみよう。まず、犬吠駅を基点にして一時の方向…つまり右斜め上に直線を引いてみる。」

七尾一朗は、テーブルに置かれていたメモ用紙のフォルダを定規代わりにして、フォルダにささつていた鉛筆で直線を引いた。そして次に君ヶ浜駅を基点に五時の方向…つまり右斜め下に。そして最後に犬吠埼灯台を基点に十時の方向…つまり左方向やや上向きに直線を引いた。すると三つの直線が、地図上の一範囲に集中した。

「あ！」

「という訳だ。多少の誤差はあるけど、おそらくこれが解答だろう。」

「銚子電鉄線と千葉県道二五四号線に挟まれた、君ヶ浜しおさい公園の林…この付近に何かがあるという訳ですか。」

「明日の朝、チェックアウトしてから調べに行こう。午前七時には朝食バイキングが開くから、食事を済ませて午前八時に玄関に集合じゃあ、おやすみ。」

「え？ あ、あの…」

「ん、何か言い忘れたかな？」

「いえ…何でもありません。」

「今夜はちゃんと休んでおいてくれ。地図上ではごく狭い範囲だけど、この方向自体がかなりアバウトだから、現場では結構広い範囲を探しまわる事になるだろうしね。」

七尾一朗が退室した後、小出貴美恵は大きくため息を突き、それから多少ふてくされた表情で冷蔵庫を開け、近所のコンビニに行つて買った方が遥かに割安だと承知しているビールとウイスキーの小瓶を取り出した。そして椅子に座りなおしてから、コップに半分程ビールを注ぎ、そこにウイスキーをつぎ足すと、あおる様に飲み干した。

「あたしだってはつきりと意思表示はしてないわよ…でもさ、旅先のホテルの部屋で若い女と二人きりになって、何も反応しないって

どういう事よ。」

ひとしきり怒鳴りちらした後、小出貴美恵は部屋の窓に視線を向けた。夜の海が外に広がる窓には、灯りに照らされた室内が写っており、最近流行のグラビアアイドルの中で顔だちの整った何人かを混ぜあわせて上品に仕上げた様な…言い換えると美人だがやや個性に乏しい…顔が見つめ返していた。

「…これでも、ちょっとは自信あるんだけどな…やっぱり七尾さんに問題があるのかな…そういえば、高宮先輩が言ってた『恋愛に対する不信』て何だろう。やっぱり無理にでも訊いてみようかな…」

携帯電話を取り出した小出貴美恵は、高宮浩子に電話をかけた。

だが「貴女がおかけになった電話番号は、電源がオフになっているか、電波がとどかない場所に…」という音声メッセージが流れると再び大きなため息をつき、二杯目のビールをグラスに注いだ。

「まあ、今日はいいか…明日、プレゼントがみつければ七尾さんも気分が盛り上がってるだろうし、そうになったら思い切って告げよう。それで『ゴメンナサイ』って言われたら、もう諦めるしか無いわね…」

第五話

「目が真つ赤だけど、一体どうしたんだ？」

翌朝、ホテルのフロントで小出貴美恵と会った七尾一郎は、相手を見た途端「おはよう」という言葉も省略してそう問いかけた。

「…何でもありません。ちょっと眠れなかっただけです。」

「大丈夫か？ 何だったら君はどこかで休んでいいぞ。探しに行くのは俺一人でなんとかなるし。」

「いえ、どうかご心配なく。お荷物にはなりたくありませんから。」

そう返答した口許には笑みが浮かんでいたが、充血した目は笑っていないかった。

「そうか…じゃあ、とにかく昨日アタリを付けた場所に行ってみよう。」

正体不明の緊張感にさいなまれながら、七尾一郎は小出貴美恵とともにホテルを後にした。目的地は目と鼻の先だったが、途中から雑然とした木立の間をぬって進む事になった。三本の直線が交差した地点と思われる場所に到達したものの、やはり地図に引いた直線は完全に正確ではないらしく、二人はビーコンの受信機をオンにしてそこを基点に周囲を丹念に探し回る事となった。

「反応しませんね。」

「まあ、この推理も当ってるかどうか確信がある訳じゃないからな。」

「そんな自信の無い事言わないで下さいよ。七尾さんらしくもない。」

「俺らしくも無いか…なあ、俺って小出君にどんな風に思われてるんだ？」

「…そうですね。頭脳明晰な合理主義者。それが時々鼻につきますけど、多くの場合は尊敬の対象です。」

「褒めてるのか、それともけなしてるのか？」

「間違いなく褒めてますけど。」

「あ、そう。」

「ただ、女性の気持ちは全く分からないだろうな、という気がします。」

「何故？」

「いえ、何となくですけど。」

「それじゃ分かる訳ないだろう？」

「…でしょうね。今の返答からも、それははっきりしています。」

「あんな…」

発しかけた抗議を呑み込みながら、七尾一郎は手に持ったビーコン受信機に視線を移した。今まで光った事の無いLEDのひとつが点滅しており、同時に内蔵されたスピーカーから微かな信号音が聞こえ始めた。

「七尾さん…」

「ああ…どうやらビンゴだ。このままもう少し進んでみよう。」

無言でうなずいた小出貴美恵とともに、七尾はさらに木々の間を進み続けた。点滅するLEDがひとつからふたつ、そして三つと増え、それに伴って信号音の音量も上がり続けた。やがて少し開けた場所に到達し、同時に受信機のLEDが全て点滅する様になった。周囲を慎重に見回した七尾一郎は、目の前の地面が少し盛り上がっている事に気がついた。

「ここか。」

受信機の電源を落としてポケットにしまい、付近に落ちていた小枝を拾って、それで盛り上がった腐葉土を払うと、何かが埋まっている事に気がついた。よく見ると何か青い色の箱が地面に埋められていて、黄色いベルトの様なものが巻かれていた。しゃがみこんでベルトを掴んだ七尾一郎は、慎重に持ち上げて地面から引きずり出した。泥だらけながら、それが真新しいクーラーボックスである事が分かった。

「七尾さん、やりましたね。」

「ああ、来た甲斐があつたな。さあて、一ファンと名乗る人物は、一体どんなプレゼントをよこしたのか。君の予想は？」

「そうですねえ、この大きさからすると、候補一は爆弾、二はビツクリ箱、三は人間の生首。」

「まじめに答えろよ。」

「十分まじめですけど？ それより、さっさと開けた方が早いと思いませんか？」

二人とも、ゲームをクリア出来た高揚感で声が上がっていた。小出貴美恵の提案を受け入れた七尾一朗は、クーラーボックスを封印している布テープを剥ぎとり、おもむろにフタを開けた。

「！」

中身が何なのかを二人が把握した瞬間、夏場だというのに空気が凍りついた。寝不足と軽度の二日酔いだった小出貴美恵は半ば失神して七尾一朗にすがり付き、七尾一朗は小出貴美恵の身体を支えてやりながら搾り出す様な声で呟いた。

「よりによって、候補三かよ……」

茫然として見つめるクーラーボックスの中に封じ込められていた人間の生首は、その皮膚の様子と周囲に立ち込め始めた悪臭から、既にかなり腐敗が進んでいる事が伺えた。

第六話

「犯人はお前だろう！」

発見者として通報した警察に連行され、訳も分からないまま地元警察の取調べ室に案内された七尾一朗に対する中年の刑事の最初のひと言がそれだった。

「どういう意味ですか？」

「どうもこうもあるか。大体あんな場所に死体が埋まってるなんて、殺した本人でなかったらどうやって分かるっていうんだ。」

「だからそれは、さっき現場で説明した通り、ビーコンの受信機を使っただけという手紙が……」

「そんなヨタ話を信じると思ってるのか。ビーコンだあ？ ヒントにしたのは映画か、それともバラエティー番組か？」

「知りませんよ。そんなのは作ったやつに訊いて下さい。」

「いいか、問題は極めて簡単だ。これは紛れもなく殺人事件で、殺人というのは誰かが誰かを殺して初めて成立する犯罪だ。殺された人間がいる以上、一番近くにいた人間がまず容疑者として疑われる。そしてそれは多くの場合、正しい結論に至るんだよ。」

ムチャクチャだ……日ごろ嫌悪している種類の論法を浴びせられた七尾は吐き気を感じ、これでこの刑事が希望している内容を自供しなかったら、今度は肉親の名前を書いた紙でも踏ませるつもりかと殺伐とした気分になった。取り調べは尚も続いたが、警察も確信がある訳では無い様子で、何ら生産性のない堂々巡りが夕刻まで続いた。もう指定席が確保された十六時三十分発の『しおさい十四号』は出発したな。もっとも切符は証拠物件として押収されるだろうか、どっちにしても使えないか……と七尾一朗が心の中で舌打ちした瞬間、取調室に別の男が入ってきた。七尾一朗の目の前がなりたてていた中年の刑事より若い、身なりも物腰もこちらの方がはるかにしつかりした感じであり、美形とまでは言い難いが、端正と形

容出来る容貌の持ち主だった。その男が刑事に二言三言耳打ちすると、刑事は表情を目まぐるしく変え、最後に『不本意』の三文字を顔に書いた様な表情に収まった。

「七尾、釈放だ。」

予期していなかった事態がいきなり目の前で展開した七尾一郎は、数瞬ほど自失の時間を必要としたが、新たに取調室に入ってきた男にうながされて自分を取り戻し、取調室を後にした。廊下を渡って面会者の待合室まで案内された七尾一郎は、そこによく見知った顔の女性がいる事を知り、ささくれだった精神状態がようやく癒される気分を感じた。

「七尾さん。」

「…随分長い間会ってない様な気がするけど、元気だった？」

無言でうなずいた小出貴美恵の笑顔の要素は、その半分近くが自分に対する気遣いだと察せられた。

「君は取り調べは受けなかったのか？」

「ええ、婦人警官の人に幾つか質問されたけど、それで終わりです。」

「それは良かった…というか、何故俺だけあんな目に遭わなきゃならなかったんだ？」

「手紙の宛て先が君だったからな。とりあえずは仕方ないだろう。」

それまで黙って背後に立っていた先ほどの男が、唐突に会話に割り込んできた。割り込まれた二人が怪訝そうな表情で視線を向けると、男は小さく咳払いをしてから懷から警察手帳を取り出して二人に示した。

「順番が逆になったが自己紹介をしておく。警視庁刑事部捜査第一課所属、見荻野勝彦警部補だ。」

ひと呼吸置いた後、見荻野勝彦と名乗った男は微かな笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「小説はいつも読ませて貰ってるよ、七尾先生。」

「……………」

「とにかくここから出よう。地下の駐車場に車を用意してあるから急いでくれ。くれぐれも玄関には近づかない様に。」

「何故ですか？」

「玄関を取り囲んでいる百名近いマスコミの相手はしたくないだろう？」

第七話

程なくして、銚子駅から歩いて十分ほどの距離にあるファミリーストランに三人の姿が見られた。

「二人とも腹が減ったろう？　わたしのおごりだ。何でも遠慮無く頼んでくれ。」

いまだ腑に落ちないという面持ちの七尾一郎は、それでも空腹である事には同意した。もつともストレスのせいか胃の具合が良いとは言えない様子を示し、結局は少量のクラブサンドイッチと紅茶だけを頼んだ。憔悴した様子で隣に座っている小出貴美恵は、何も食べる気がしないと言ってドリンクバーだけを注文した。

「それにしても、随分と待遇が良くなりましたね。一体何が目的なんでしょうか？」

遠慮の無い七尾一郎の問いかけに対し、見荻野は眉ひとつ動かさずに返答した。

「まず、君が不満を感じているであろう件だが、今時の警察の取調べなど大体あんなものだよ。まして今回の事件の特異性とマスコミの注目度に警察側はかなり神経質になっている。一刻も早く犯人を挙げて真相を究明したいというのが正直な処だからね…もつともそれとは別に、あの刑事の凡庸さはわたしもいささか閉口したが。」

「……………」

「わたしがあの署に到着した時、上では君たちを証拠不十分で釈放すべきという見解でまともりかけていたんだが、あの刑事はもう少し粘れば自分で白状させられると言って時間延ばしをしていたそうだ。無能ゆえに功績にこだわる、非常に分かり易いタイプだが、それゆえ君達をすぐに釈放するための『呪文』も簡単に思いついた。」

「呪文？」

「君が新進気鋭の小説家で、出版社から目をかけられている。そしてその出版社の社長が元警察のキャリア…つまりエリート階級から

の天下りだと耳打ちしてやったのさ。評価と昇進しか念頭に無い様な俗物が、そんな『権威』と事を構える訳がない。結果はご覧の通りだ。」

「なるほどね。からくりは理解しました。しかしそんな嘘がばれたら、後で問題になりませんか？」

「あの雑誌を出してる出版社の社長がキャリア出身というのは本当だよ。その前の句はともかくとして。」

「…それで俺は貴方に涙を流して感謝すべきですか？ それとも交換条件は何だと質問すべきですか？」

見荻野は僅かに苦笑した様な表情をうかべながら、目の前に運ばれて来ていたコーヒーに一包のダイエツト甘味料を入れ、スプーンでかき回した。

「君には今のところ二つの進路が用意されている。『加害者』と『被害者』だ。前者は先ほどの刑事が説明したと思うが、発見に至る経過が君の説明通りなら、君は真犯人の罠にかかった哀れな被害者という見方が成立する。君にわざわざ列車の切符やホテルのクーポンを渡し、推理作家としてのプライドをくすぐる様なケレン味たっぷりの謎を用意し、結果的に濡れ衣をきせるように仕向けたという事だ。」

「…その通りですね。」

「ただ、今のところ君たちの事は単なる死体発見者としか発表していない。名前も住所も伏せている。だが今後の捜査の進展次第ではどうなるか分からない…そこで、君にも捜査に協力して貰いたいと思っているんだ。君が被害者であるとしても、大学の部室に置かれた品物や手紙の文面からして、全く無関係とは思えないからね。だから君が知っている限りの事を教えて欲しい訳だ。君だって本当に潔白ならそれを証明したいだろ？」

「おっしゃりたい事は分かりますが…」

七尾一朗は隣に座っている小出貴美恵に視線を投げかけた。

「今日のところは勘弁してもらえませんか？ 二人とも疲れてます

し、これ以上遅くなると帰りの列車も無くなりますから。」

「なんなら都内まで車で送ろうか？ パトカーか護送車ならすぐに用意出来るが。」

「…謹んでご遠慮申し上げます。」

「冗談だよ。では今日のところは四つだけ質問に答えてくれ。そうすれば帰りの切符代は特急券も含めて捜査協力費として進呈しよう。」

「それは有難いですね。で、質問というのは？」

「まずあの被害者の件だが、実はもう正体が判明している。緋賀利康という都内在住の男性だ。」

「随分とまた早くわかりましたね。まだ半日しか経ってないのに。」

「警察の優秀さの賜物だよ…」と言いたところだが、実はあのクローボックスの中に、被害者の名前と住所が印字された紙が同封されていた。君に届いた手紙と同じ紙と印字でね。」

ポケットから取り出したメモ帳を見ながら、見荻野は説明を続けた。

「緋賀利康、二十八歳、都内のマンションに一人暮らし。何か心当たりは？」

「いえ、全く知らない人物です。職業は何ですか？」

「無職だ。ただし三年前までは、都内の田那架倉庫という会社に務めていた。勤務態度は真面目な方だったらしいが、ある日突然辞めてしまったそうだ。その後どこかに正規に務めたという形跡は無い。」

「田那架倉庫…初耳ですね。少なくとも知り合いに務めている者はいません。」

「そうか。では次に、君にこういう罫をかけそうな者に心当たりは？」

「いいえ。そもそも今まで一度もこんな事は起こりませんでしたから。」

「部室には鍵が掛かっていたそうだが、普段鍵を持っているのは？」

「ここにいた部長の小出君と、後は学生課で保管されているスペアだけです。」

見荻野の視線が、一瞬だけ小出貴美恵に向いた。

「ですが、小出君が部長に就任して鍵を管理するようになったのは一週間前の事で、その前の一年間は元部長の俺が持っていました。鍵の管理は歴代の部長が引き継いでいきますし、誰かが以前に合鍵を作ったという可能性もあります。第一あの鍵は普通のシリンダー錠ですからピッキングで簡単に……」

「分かったよ。そうムキにならなくてもいいから。」

微かにせせら笑うような口調でそう返答された七尾一朗の口もとが僅かに歪んだ。

「では最後の質問だが、『銚子』という場所で何か思い当たる事は？」

「……いえ、何も。来たのは生まれて初めてです。」

この時、小出貴美恵の表情が僅かに変化した。見荻野は気がつかなかった。

「そうか。実は今回の事件は『銚子』がキーワードになりそうなので、心に留めておいて欲しいんだ。死体の発見現場というだけではなさそうなのでね。」

「といたしますと？」

「被害者の緋賀利康だが……実は高校を卒業して東京で就職するまで銚子に住んでいた事が分かったんだ。どんな暮らしぶりかまでは調べがっていないけど、偶然にしては出来すぎている。」

「なるほど……わかりました。覚えておきます。」

「まあ、いずれにせよこれだけ大量に物的証拠が残っているんだ。手紙、列車とホテルのクーポン券、ビーコンのシステム、クーラーボックス……おそらくはそれほど時間もかからず真犯人にたどり着けるだろう。君の証言の真偽が判明するのも、遠い未来ではなさそうだ。」

「……………」

「またいずれ話を聞かせてもらおうと思うが、その時は協力をお願いする。では、今日はお疲れ様。」

第八話

ファミリーレストランの出入り口で見荻野と別れた二人が徒歩で銚子駅にたどり着いた時は、午後六時を過ぎていた。特急しおさいには、かろうじて最終の十六号に間に合ったが、新宿駅行きなので東京駅を目指す二人は錦糸町駅で乗り換える必要がある。既に指定席は売り切れていたが、全九両のうち七両ある自由席は比較的空席があり、心身ともに疲弊しきった二人はゆつくりと座りながら帰る事が出来た。

午後六時四十分、列車は定時に銚子駅を出発した。夕刻の銚子の町並みを窓越しに眺め続ける二人は、互いの空間を支配する気まぐしい沈黙から逃れられないでいた。意を決した様子の七尾一朗がようやく口を開いたのは、既に佐倉を過ぎて総武本線が複線になってからだった。

「あの…」

「…え？」

「今日はすまなかった。こんな事に小出君を巻き込んでしまつて…」
「…別に七尾さんのせいじゃありません。本当に七尾さんが犯人でなければですけど。そうでしょ？」

「……………」

「それに、どういう理由かまだ分かりませんが、あの紙袋はあなたが鍵を管理している部屋に置かれていました。責任の一端はあたしにもあります。」

ため息をつくだけの間があつた後、今度は小出貴美恵が口火を切った。

「それにしても、犯人の目的は一体何なのでしょう？ 緋賀…でしたっけ。その男を殺して罪を七尾さんになすりつけるというのが、今考えられる一番自然な状況だと思いますけど、そこまで七尾さんを陥れる理由が分かりません。何かよほど七尾さんに恨みがあるん

でしょうか。」

「思い当たるフシは無いな。まあ、生きていれば恨みのひとつやふたつは買ってるかも知れないが……」

そこまで言いかけた七尾一郎は、隣席の小出貴美恵が顔をしかめながら、自分の手で側頭部と耳の下あたりをさすっている事に気がついた。

「大丈夫か？ やっぱり大分疲れている様だけど。」

「いえ、大丈夫です……あの、それと……もうひとつ訊いていいですか？」

「ん？ ああ、答えられる事なら……」

「七尾さん、『銚子』というキーワードに、本当に心当たりは無いんですか？」

「……何故？」

「何故って、あの見荻野警部補にそう問いかけられた時、七尾さんの様子が少しおかしいと思ったからです。それと今思い返してみると、部室であたしが『それは銚子電鉄の駅名だ』と言った時、銚子という地名に何かひっかかった様な……」

「……………」

「訊いてはいけない話でしたか？」

「いや、構わない。ただ今回の事件と関係があるとは思えないし、むしろ余計な事を言って相手に迷惑をかけるのもどうかと思うから言わなかった。」

「相手？」

「汐見亜矢……俺や高宮浩子と一緒にミステリー研究部に在籍していた同期生でね。ある事情で一年生の夏に中退したんだけど、その汐見が銚子生まれだったんだ。」

七尾の顔に浮かんだ、今まで見た事無い寂しげな表情に、小出貴美恵は目をそむけたい事実の存在を認めざるを得なかった。

「その……汐見さんというのはもしかして……七尾さんの……？」

「恋人だ……いや、恋人だった。」

反対側から来た佐倉方面行きの列車としおさい十六号がすれちがったのはその時だった。二五五系車両内の音場と気圧が微妙に変化し、対向列車の車内からもれる照明が二人の表情にざわめく様ないろどりを加えた。

第九話

「それはまた災難だったわね。」

事情を知った高宮浩子が小出貴美恵を都内のエスニック料理店に誘ったのは、それから数日後の事だった。濡れ煎餅をお土産に貰ったお礼として、その店の人気料理であるナシゴレンを小出貴美恵にご馳走した高宮浩子は、小出貴美恵の身にふりかかった一件を、けだるそうな様子でそう論評した。

「ここ数日のワイドショーはあの事件ばかり採り上げてたけど、まさか貴女達が関わっているとは思わなかった。それで、少しは持ち直した？」

「ええ。まあ……」

「それにしても七尾のやつ、まだ亜矢に未練があるのかしら。別れてもう三年にもなるんだから、いい加減諦めればいいのに、どうも『男』っていう生き物は、あたし達『女』とは違う思考原理で生きているみたいね。」

「あの……高宮先輩は、汐見亜矢さんという方と個人的な連絡があるんですか？」

「……『女』にもよるか。貴女は貴女で七尾に対する想いはゆるがないみたいだし。」

「……………」

「残念だけど、あたしも今は連絡が取れてないわ。一年生の時に中退して、それまで友人関係だったあたし達にも、いなくなるから探さないで欲しいと言って……とにかく見事なくらいに消えてなくなつたわね。もつとも、あんな事があつたんじゃ無理もないかも知れないけど。」

「あんな事？ あ……差し支えなかったら教えて頂けませんか？」

「そうね、この間は言わなかったけど……その顔は事情を聞かないと納得できないという感じだものね。」

微かに首肯した小出貴美恵に対して、高宮浩子は二秒ほど考えこんだ上で口を開いた。

「七尾と亜矢は、高校時代から恋人どうしだったらしいわ。あたしは北南大学に入学して初めて二人にあっただけど、本当に仲が良くてね。クラブの先輩達から冷やかされ続けてた…あの事が起きるまではね…」

高宮浩子は一旦言葉を切り、デザートに頼んだカットフルーツ入りのカクテルを口にした。

「三年前、ちょうど今頃の季節だったけど、亜矢のお父さんが死んだの。自殺だったそうよ。」

「自殺…」

「自宅のバルコニーから飛び降りたらしいのよ。原因までは知らないけど。」

「……………」

「亜矢のお父さんというのは、『汐見ホールディングス』という会社の社長だったの。今は別の投資会社に売却されて名前も残っていないけど、当時はかなり注目されていたらしいわ。ただ、きわどい方法で事業を拡張しているという風聞もあったそうよ。その社長が死んだものだから、幾つかの経済紙やゴシップ誌が背後関係とか騒ぎ立てた。でも警察が自殺だと断定したので、一応騒ぎは収まったの…ところがそれから程なくして、亜矢は突如として退学届けを出し、七尾やあたしの目の前から姿を消したのよ。その後はさっき言った通り、連絡がまったく取れない状態になったの。」

「一体、何故…」

「さあねえ、そこまでは分からないわ。父親が自殺して生命保険が下りなかったから、亜矢自身が働くしかなかったなんて無責任に推理していた者もいたけど、加入時期や条件によつては下りる生命保険もあるのよ。亜矢の父親がそれに該当したかまでは分からないけどね。それにもし生命保険が下りなかったとしても、伝え聞くとここによれば遺産はかなりの額だったそうよ。案外それが身を隠す理

由じゃないかという者もいたけど……どっちにしても憶測の範囲でしかない話なのよ。」

「……………」

「ただ、亜矢が姿を消すと同時に七尾は亜矢の事を一切口にしなくなつた。明らかに二人の間に何かあつたという事は読み取れたわ。それが何かまでは分からない。ま、これ以上は本人に訊くしかないわね。七尾からはあの後連絡が来たの？」

「いえ、何も。」

「電話もメールも寄越さないの？ まったくあの男は……」

つとめて軽い調子でそう言った高宮浩子だが、目の前で懊悩の海に沈みかかっている後輩を放つては置けない、と感じさせる表情も浮かべていた。

第十話

「では鑑識の報告から。」

ほぼ同じ時刻、警視庁の合同捜査本部で会議が始まっていた。本部長の席に座っていた初老の男に指名された鑑識の係官がおもむろに立ちあがり、手にしている報告書を読み上げた。

「まず、手紙に使われたPPC用紙や封筒、紙袋、クーラーボックス、封印していた布テープ、クーポン券からは『発見者』である七尾一朗の指紋が検出されました。手紙やクーポン券などからは小出貴美恵の指紋も検出されています。その他にも幾つかの指紋が検出されましたが、照合の結果、いずれの指紋も犯罪者リストに該当するものはありませんでした。」

「次に、遺留品の購入ルートの搜索状況は？」

現場聞き込みを担当した捜査員が、あまり色良くない表情で立ち上がった。

「品物の多くは全国チェーンのディスカウントショップで毎日大量に売られているものと判明しました。特にクーラーボックスは分長い間モデルチェンジをしていない定番商品で、メーカーからの情報では、出回っている数は何千という単位だそうです。」

「切符やクーポンは何かつかめたか？」

「北南大学ミステリー研究部で発見された三日前の昼頃に、都内の旅行代理店で売られた事が分かりました。ですが、その時間帯は混雑していて従業員は記憶が曖昧ですし、監視カメラも、映像を記録しているハードディスクが既に上書きされてしまっていて、購入者の特定は出来ませんでした。購入申し込み書の氏名欄には『七尾一朗』と記入されていますが、その時間は七尾一朗も小出貴美恵も大学の前期試験を受けている最中だった事が判明しています。」

「なお、申し込み書の筆跡が異なっていますし、該当する指紋も検出されていません。」

鑑識係がそう付け足した報告に、本部長もまた憂鬱そうな表情を浮かべた。

「つまり、その点でも七尾一朗のアリバイは成立した訳か…印字された文字は？」

「ごくありふれたゴシック体です。しかもごく丁寧に一旦コピーを通してますので、プリンタやソフトの特定はかなり困難です。」

「ビーコンの出所は？」

「受信機と発信機のどちらも自作品の様です。使われていた部品はどれも秋葉原あたりで簡単に手に入る類のもので、工作自体もそれなりの電子工作の知識と経験があれば製作はそれほど困難ではありません。」

「見荻野。七尾一朗か小出貴美恵のいずれかが電子工作の知識を持つていそうな気配はあるか？」

本部長に指名された見荻野が手を振りながら返答した。

「いえ、二人とも文系の学生で、それらしい様子もありません。」

「…となると、やはり七尾一朗が犯人という可能性は低いだろうな。真犯人は冤罪をひき起こすのが目的だったという事か？」

「というより、本気で犯人に仕立てるつもりなら、もう少しやりようがあると思うのですが…むしろ七尾を事件に巻きこんで迷惑をかけてやろう、或いは恥をかかせてやろうという意味が感じられます。」

「いずれにせよ、七尾が『被害者』である事はどうやら確実らしいな。」

「ええ。ですが、多少気になる点があります。」

見荻野の発言に、本部長は怪訝そうな表情を浮かべ、続きをうながした。

「七尾一朗には以前かなり親密にしている恋人がいた事が判明しました。当時七尾と同じ北南大学のミステリー研究部に所属していた汐見亜矢という学生で、三年前に自殺した汐見ホールディングスの社長、汐見和宏の一人娘です。」

会議室にいる何人かの捜査員が、その会社名に反応した。

「それはまた意外な名前が出てきたな。確か会社自体はもう無くなっているんじゃないか？」

「はい。別の投資会社に売却されています。残された社員もその投資会社に移動しました。」

「それで、その汐見亜矢がどうした？」

「七尾は『銚子』という地名に心当たりが無いと言っています。ところが調べたところ、汐見親娘は銚子の出身なんです。」

「ほう？」

「十年前、汐見和宏が地元の醤油会社に務めていた時に、和宏の妻……亜矢の実の母親でもあります……が病気で他界しました。その直後に和宏は退社し亜矢を伴って上京、ベンチャー企業の汐見ホールディングスを立ち上げ、ＩＴ関連の投機が成功して数年で急成長を遂げました……もともと、裏で色々えげつない事をやっていたという噂もあり、自殺した時も二、三のマスコミがその辺をつつついていた様です。いずれにせよ、当時の七尾一郎と汐見亜矢の親しさは周囲の人間も認めていますから、七尾が汐見の出身地を知らなかったというのは不自然でしょう。」

「今の関係はどうなっているんだ？」

「実は、父親が自殺した後、汐見亜矢は消息を絶っています。」

「失踪したのか？」

「父親の葬儀を執り行い、法律上の手順に従って遺産相続を済ませた後、もうたくさんだ、探さないで欲しいと周囲に言い残して蒸発した様です。無論七尾とも別れました。その後はどうなったかはわかりませんし、七尾と連絡を取っている形跡も無い様です。」

「だとすると、今回の事件とのつながりは考えにくいな。七尾が銚子の事を知らないと言ったのも、別れた彼女の事を思い出したくないという気持ちがあったとすれば無理も無いだろうし。」

「その通りですが、実は問題がもうひとつあります。」

「何だ？」

「被害者の緋賀が、務めていた倉庫会社を退社したのがやはり三年前なのです。その後別の会社に再就職した形跡が無い上、アルバイトをしていた形跡も、金融機関から金を借りていた形跡もありません。それなのに、緋賀の暮らしぶりは就職していた頃より格段に良くなっています。それまでは六畳一間の木造アパートに住んでいたのに、十六畳ものリビングがある鉄筋のマンションに引越して新車も購入しているし、そのリビングには豪勢なソファや五十インチの薄型テレビが置かれていました。」

「こちらは親が金持ちという訳ではないのか？」

「いえ、調べたところ、緋賀の両親は彼が小学生の頃に交通事故で死亡しています。その後は親類の家を転々としていて、あまり恵まれた境遇にあつたとは言えない様です。」

「なるほど、そんな境遇で、さらには退職して安定した収入が得られない状態になったのにも関わらず、そんな生活を営める金を持っている。しかもそれが始まったのが三年前：汐見和宏が自殺したのと時を同じくして……か。確かに何かある様には思えるな。汐見亜矢の指紋のサンプルは手に入ったのか？」

「大学から願書を提出して貰って照合しましたが、七尾に届いた手紙には一致する指紋はありませんでした。」

「それでは汐見亜矢を被疑者に挙げるのは難しいな。だが、いずれにせよ緋賀の金の流れは解明する必要があるそうだ。無論、緋賀の交遊関係もな。」

「はい。室内に携帯電話の充電器が残されていたので電話会社に問い合わせた所、携帯電話の契約をしていました。本体は見つかっていませんが、電話会社の方に過去三ヶ月間の通話記録が残っていましたので、これから緋賀と電話連絡をした相手に聞き込みを開始しようと思います。」

「わかった。ではその線で捜査を続行。それと見荻野はちよつと残れ。では解散。」

捜査員たちが退室した後、見荻野は怪訝そうな表情で本部長に相

対した。

「何か問題でも？」

「…見荻野。汐見ホールディングスの件だがな…くれぐれも深追いだけはするな。」

「は？」

「君自身が言っていただろう？『裏で色々えげつない事をやっていった』と…だが、ああいう連中がそういう事をするという事は『そういう事に応じる相手が存在する』という事だ。意味は分かるな？」

「…なるほど。よくわかりました。ご忠告感謝いたします。では。」

型通りの敬礼を施した見荻野の顔には、何かを読み取れる様な表情は浮かんでいなかった。

第十一話

左菜海投資株式会社社長の左菜海蓮司と、その自宅を訪ねてきた知人が、応接間で殺しあつた…という事件が発生したのは、その夜の事だつた。夫人である左菜海怜奈が一〇番に通報してきたが、その電話に対応した者は、相手が何を言っているのか理解出来ず、最初はいたずら電話として処理するつもりだつた。だがいたずら電話では無い事は、現場に最初に到着した警察官が強烈にこみ上げて来た嘔吐感とともに確認した。

捜査を担当したのは見茨野の後輩である多田倉という刑事で、その多田倉が現場に到着したのは通報から一時間程後の事である。豪華な造りの邸宅の玄関から応接室に踏み入った多田倉も、その瞬間顔をしかめた。

「こりや、ひどいな…」

事件現場はバケツで大量の血をぶちまけた様な光景だつた。両者とも出刃包丁で相手の身体を数十箇所へ渡つて突き、或いは斬り裂いて相手を殺そうとしていた事は、その死体の状況が物語っていた。同じ部屋にいた左菜海の妻である怜奈も二箇所ほど切り傷を負っていたが、命に別状は無さそうだつた…ただし、発見された時の左菜海怜奈は、胎児の様な姿勢で全身を縮めながら震え続けており、何を訊いても意味不明の音声しか発しなかつた。多田倉が現場に到着した時は、左菜海怜奈は現場である応接間から少し離れた寝室に運び出され、救急車が来るまで婦人警官の一人が懸命になだめているという状態だつた。

「そうか、まあ無理も無いとは思うが…それで、殺し合いを演じた二人の身元は分かつたのか？」

「部屋着姿の方はこの家の世帯主である左菜海蓮司です。もう片方の外出着姿の男も、持っていた運転免許証から正体が判明しました。」

鑑識はそういいながら、保護用のビニール袋に入れられた運転免許証を多田倉に手渡した。

「甲田麻砂鬼…この生年月日だと今日の時点で二十八歳か。住所は東京都…」

「そして、こちらが寝室にあつた左菜海蓮司の運転免許証です。」

「…ん？ この二人、どちらも二十八歳で本籍が鉾子市だな。」

「その様ですね…とにかくこの二人が殺しあつたというのは間違いなさそうです。奥さんの左菜海怜奈を含めて三人以外の誰かがこの現場にいた様子はありませんし、出て行つた形跡もありません。」

「左菜海怜奈が犯行に加担した可能性は？」

「それは何とも…この部屋の状態では、誰が誰を殺したかといった事を軽々に判断出来ません。まだ凶器の分析も済んでいませんから。」

「で、その凶器は？」

鑑識が保存していた二本の包丁は、どちらも刃渡りが二十センチほどあり、血で赤黒く染まっていた。

「死体を解剖するまで断定は出来ませんが、二人とも刃物で全身を傷つけられ、出血性のショック死を起こしたものと推察されます。」

鑑識が説明をしている最中に救急車特有のサイレンが接近し、玄関付近で止んだ。降ろされたタン力は左菜海怜奈がいる部屋に行き、入院させる為に運んでいった。それらを見送りながら、多田倉は小さなため息をついた。

「唯一の目撃者があんな状態では事情聴取のしようがないな。まあ何日か経てば落ち着くだろうから、その時あらためて病院に行ってみるとして、まずはこの甲田麻砂鬼という男の家に…」

「多田倉刑事。玄関に見荻野警部補がお見えですけど。」

「…え？」

慌てた様子の多田倉が玄関にかけつけ、狐につままれた様な面持ちの見荻野と対峙した。

「多田倉？ おいどうなってるんだ、これは。」

「どうって……見萩野さんこそ、何故ここに？」

「俺はこの家に聞き込みに来たんだ。そうしたらこんな有様だったから……」

「聞き込みですか？」

「ああ。俺が今担当している事件の捜査でな。例の生首事件だが、その被害者がこの家と頻繁に連絡を取っている事が分かったんだ。この家の者に事情聴取をしたいのだが。」

「……残念ながら今のところ、この家の者は誰も事情聴取に応じられません。奥さんはたった今入院しましたし、その夫と思われる人物は、応接室で血の海に横たわっています。」

第十二話

数日後、見荻野の捜査班が会議室に集まっていた。判明した事実を踏まえて多田倉の捜査班も合流しており、二つの事件は一元的に捜査されていた。

「左菜海蓮司、二十八歳、左菜海投資株式会社の社長です。左菜海投資というのは二年半前に設立されていますが、いわゆるデイ・トレーディングを手がけていて、実際に資金を運用しているのは左菜海一人の様です。」

「二年半前か…」

つぶやく様に返答した見荻野に小さく首肯しながら、多田倉は報告を続けた。

「次に甲田麻砂鬼。二十八歳、以前は都内の小さな印刷会社に勤務していましたが、三年前に退職しています。以後はこれといった定職に就いていませんが、生活に困窮している様子は無かった様です。」

「緋賀利康と全く同じだな。」

「はい。三人とも出身が銚子で、年齢も卒業年度も出身校も同じ、高校卒業後に上京して就職したという経歴も、そして三年前に突如として金銭的に潤ったというのも同じです。」

「まあ、左菜海の場合は二年半前に会社を立ち上げたという事だから半年のタイムラグがあるが…左菜海投資の企業規模は？」

「二年目にあたる前回の決算では、諸経費や税金を除いた純益が年間約五億円です。事務を担当する奥さんと二人でそれだけ稼いでいますから事業として成功したと言っても良いでしょうね。」

「奥さんというのは、俺が到着する寸前に救急車で運ばれたという女性の事か？」

「はい。左菜海怜奈、二十二歳。旧姓は小野。二年前に結婚したそうです。」

「とすると左菜海が企業家としてスタートして半年ぐらいか。財産目当てに言い寄ったという事は？」

「いえ、左菜海投資が軌道に乗ったのは、むしろ結婚してからだそうですね。それと周囲の話では、左菜海の方が一目惚れで、あらゆる手を尽くして怜奈にプロポーズしたそうです。なんでも左菜海は理想の女性だと周囲に洩らしていた様で、事実かなりの美人だそうです。」

多田倉はそう言いながら写真のカラーコピーを一枚見荻野に見せた。どこかのリゾートで楽しむ夫婦らしい姿が写されていた。

「なるほど、ちょっと分かりにくいけど、美形である事は事実らしいな。事情聴取はまだ無理なのか？」

「医者の話では大分落ち着いてきているそうですので、今日これから病院に行く予定です。」

「そうか。何か分かったらすぐに知らせてくれ。話を左菜海投資に戻すが、設立に際して資金はどこから出ている？」

「資本金は五千万円ですが、出資元がどうも分かりません。左菜海は取引先に『宝くじが当たった』とか説明していたようですが、今のところそんな事実は見当たりません。」

「会社を設立する前は、左菜海は何をしていた？」

「都内の電気会社に勤めていました。電気会社といっても電子機器の配線や配線工事が主な業務ですが、これに関しては極めて重要な事が分かりました。」

多田倉は一旦言葉を切り、内容をもう一度確認する様に、メモに視線を走らせた。

「その電気会社が、売却前の汐見ホールディングスと取引をしていたんです。主な設備機器の納入や工事、保守を行っており、担当者はかなり頻繁に汐見ホールディングスに出入りしていた様です。取引書類に記載された担当者名は、ほぼ全て左菜海です。」

「なるほど、おぼろげながら輪郭が見えて来たな。」

見荻野はそうつぶやきながらホワイトボードに関係者の名前を書

き、それを線で結んで行つた。

「左菜海蓮司は汐見ホールディングスの出入り業者で、緋賀とも甲田とも知己があつた。三年前に汐見和宏が自殺したのと同時に三人は大金を手に入れた。左菜海投資の資本金の額からして、一人頭数千万という金額が推定出来る。三人合わせて一億数千万ないし二億…宝くじが当たつたというのが本当ならともかく、あの時点で彼らがこの金額を手に入れられるとしたら、汐見ホールディングスからとしか考えられない。」

「しかし具体的にはどういう方法で？ それにその事が今回の二つの事件とどういう関係にあるんでしょう？」

「それはまだ分からない。憶測は色々と出来るが…まず、汐見和宏の自殺の件を担当した者に話を聞く事は出来ないか？」

「出来ると思いますが、まず本部長に話を通す必要がありますね。」

多田倉の返答に、見荻野は本部長から突きつけられた『忠告』を思い出し、うんざりした表情を浮かべた。

「ちよつと厄介だな。しかしまあ、そうも言っていられないか。」

ほんの僅かの間の後、考えをまとめた様子の身荻野が各員に指示を告げ始めた。

「多田倉の班は引き続き左菜海と甲田の周辺を調べてくれ。無論、左菜海怜奈への事情聴取も頼む。他の者は引き続き緋賀利康の周辺の捜査を続けてくれ。」

「七尾達はどうしますか？ こうなつてくると汐見亜矢の関係者も無視出来ないと思いますが。」

「俺が直接手がける。場合によっては…少し突っ込んだ話をする事になりそうだ。」

第十三話

「見荻野さん…？」

その日の昼過ぎ…自宅のアパートに訪れた見荻野を玄関で出迎えた七尾一朗は、微かだが明確に相手を歓迎していない表情を浮かべた。

「突然ですまないが、また聞かせて欲しい話が出てきたのでね。時間を貰えるかな？」

「あの、実は部屋が散らかってまして、中に入って貰うのはちょっと…」

「ここで構わないよ。必要な事を教えて貰ったらすぐに帰るから。」

「…わかりました。それで、聞かせて欲しい話というのは何ですか？」

「汐見亜矢の事だ。」

「……………」

「いや、正確に言えば汐見亜矢とその父親の和宏、そして和宏が経営していた汐見ホールディングスまで入るんだが…実は調べているうちに、今回の事件は三年前に起こった汐見亜矢の父親の自殺が大きな鍵になっている事が明らかになってきてね。その点を調べているんだ。」

「俺は亜矢の父親と面識はありませんけど。」

「だが、汐見和宏が自殺した時点で君と汐見亜矢は付き合っていた。当然ながら君と汐見亜矢の間でその話は出ているだろう…そこで訊きたいのだが、その時、汐見亜矢は何か気になる様な事を言っけなかったか？」

「気になる様な事…と、言われても…」

「例えば、汐見ホールディングスの経営に関する事とか。」

「いや、ちよつと思ひ当りません…というより、あのすぐ後に、俺と亜矢の関係は終わっただけですよ。」

不快な緊迫感を伴った空気が、その場を支配した。

「親父さんが死んだ後、たった数日で亜矢はすっかり変わってしまった。ものの見方や考え方が全ての面でマイナス思考になり、食べ物好みとか服装とか、そんな程度の問題ですぐに言い争いになって、一緒にいる時間のほとんどが気まずい空気に包まれる様になった……」

「……」
「たった一人の肉親が死んだのだから人格が変わっても不思議じゃない。だがその変わりようは、俺が世の中で一番避けて通りたい種類のものだった。もういい加減にしてくれ、というのが正直な気持ちだったんですよ。」

「あたしが見ていた限りでは、あなたの対応が、亜矢をますます意固地にしていった様に思えたわ。」

だしぬけに割り込んできた気の強そうな女性の声に、二人は顔を見合わせた。自分の背後から聞こえた声だと気がついた見荻野は、怪訝そうな表情で振り向いた。そこには若い二人の女性の姿があり、見荻野は片方が小出貴美恵だと気がついたが、声の主はもう片方の見知らぬ女性の様だった。

「高宮……どうしてここに……」

七尾一朗が高宮と呼んだ女性の顔には、好意的な表情は浮かんでいなかった。

「どうして？ 貴方、あの後、この娘に電話一本、メール一通よこさないらしいじゃない。しかも、こちらからメールしても返信は無いし電話には出ない。結果論とはいえこんな事件に巻き込んでしまった可愛い後輩に、どうしてそういう態度がとれる訳？ ミステリ―研究部の唯一の同期生として一言文句を言っつて、その上で彼女に謝って貰わなければ気がすまないから、こうやって出向いてきたのよ。」

「……」

「すっかり元通りよね。今の貴方は亜矢と別れた頃と同じ、正論と

屁理屈が手を組んで生み出した醜悪な詭弁製造マシンだわ。相手の事はなんだかんだ言うくせに自分の醜さには気がつかない。あの時だって、貴方が部長に就任した頃にはようやく身につけていた気配りの、せめて百万分の一でも亜矢に示す事が出来たら、彼女は救われたと思うわ。それなのに……」

「高宮先輩、もうやめて下さい！」

半ば懇願する様な叫び声で、小出貴美恵は高宮浩子の弾劾を押し留めた。数瞬の沈黙が四人を取り巻いた後、落ち着きを取り戻した様子の高宮浩子が見荻野に話しかけた。

「事情聴取の邪魔をして申し訳ありませんでした。終わるまでしばらくその辺で時間を潰していますから、どうぞごゆっくり。」

「いや、ちよつと待ってくれ。」

「？」

「君は汐見亜矢と知り合いなのか？　だとしたら君にも話を訊きたいんだが。」

「ええ、構いませんよ。プライバシーに関する話題はちよつと困りますけど。」

「……教えて欲しい事は、汐見亜矢がいなくなる直前、何か気になる事を話していなかったかという事だ。特に、父親の会社に関して何か……」

「汐見ホールディングスに関してですか？　さあ……亜矢から聞いたのは、あれは亜矢のお父さんがいて初めて成立する会社だから、自分を含めて誰が跡を継いでもうまくいかない、だから売却する、という事ぐらいです。まあ、お父さんが自殺して色々とショックもあったでしょうし……」

「自殺じゃない。」

不意に発せられた七尾一朗の言葉が、それを聞いた三人の動きを止めた。声がした方にゆつくりと顔を向けた三人は、発言者の表情にそれまでとは別の意識が浮かんでいる事を察した。

「忘れていたよ……というより、思い出さなくなかった。あの時は亜

矢との仲が次第に絶望的になっていつて、そんな時にそんな話をされても……でも、確かに言ってたんだ。父親は自殺したんじゃない。殺されたんだって……」

「その話、詳しく教えて貰えるか？」

一気に深刻な口調に切り替わった見荻野にうながされ、七尾一朗は順を追って話し始めた。

第十四話

「元警視庁の土山支頭夫警部補ですね？ 見荻野といいます。」

午後三時頃：閑静な住宅街の一角に建てられた、これといって特徴の無い日本家屋の庭先で、その老人は盆栽の手入れにいそしんでいた。見荻野が警察手帳を見せながら挨拶すると、老人はうさくさそうな表情で見荻野を見やった。

「五葉松ですか。盆栽の基本だけに逆に難しいそうですね。」

「興味も無いものを無理やり話題にして場をつなげようとしても白けるだけだ。用があるならさっさと見え。」

「…失礼しました。実は貴方が定年の前に担当した事件について、幾つかお伺い出来ないかと思ひまして…」

「捜査記録なら整理された資料として本庁に保管されている筈だが？」

「お伺いしたいのは、その捜査記録が本当に正しいかどうかという事です。」

「何の話だ。」

「汐見和宏の件です。」

老人の右手にある剪定用のハサミの動きが一瞬止まった。

「汐見ホールディングス社長、汐見和宏：彼は三年前、自宅の三階のバルコニーから地上に落ち、脳挫傷で死にました。当時の捜査の結果、自殺と断定されています…この捜査の指揮を担当していたのが土山さんですよ。」

「……ああ、そんな事件もあったな。今の今まで忘れていたが。」

「思い出して頂いて感謝します。では、その捜査の過程で得た汐見和宏の娘の証言の事も思い出して頂けませんか？」

「…さあ、どんな証言だったかな。年をとるとそういう細かい記憶はほとんど抜け落ちて行くのですね。」

「娘は、証言した私服が土山と名乗った事から、その証言がどう扱

われたかま度を当時の恋人に話し、どうすれば良いのか相談して
います。もつとも、相手との関係に深刻な亀裂が入っていたので、相
談は実を結ばなかった様ですが。」

見荻野は、自分が今担当している事件の概要を説明し、その過程
で不審な点が浮かび上がった事を告げた。

「…で、その相手の記憶では、娘の目撃証言はこうです。父親が自
殺した当夜、外出先から帰ってくる途中、三人の男が妙にせわしな
い様子で、家の玄関に通じる路地から出てきた。不自然なくらい大
きな荷物を抱えてね。そしてその内の一人が、以前会社に寄った時
に会った事がある電気工事会社の社員だと気がついた。彼が何故こ
んな所にいるのだろうと不思議に思いながら帰宅したら、庭先で倒
れている父親を発見した。当然ながら娘はパニックに陥り、救急車
を呼ぶのが精一杯だった。しかし三日ほど経つてようやく落ち着い
た娘が、自宅の金庫を開けて調べたところ、いつも必ず用意されて
いる筈の億単位の現金が消えて無くなっていた。担当の刑事である
土山さんにその事を告げた所、土山さんからは翌日になってこう言
われたそうです。『そんな現金の事は会社では把握していない様だ
が、一体何を根拠に言っているのかね。』…娘も世間知らずではあ
りませんから、汐見ホールディングスが一部の金権政治家と癒着し
ていた事は薄々気づいていたし、自宅に用意されていた現金がそれ
に関係している事ぐらいは把握していた様です。しかしどんな種類
の金であれ、父親が死んだ時点で億単位の現金が無くなったのは、
娘の記憶では確実な事であり、それは当然ながら先の三人を目撃し
た記憶に結びついた。娘は改めて自分の目撃証言を土山さんに訴え
たが、それにも関わらず警察は汐見和宏の死を自殺と断定、事件発
生後たった一週間でそれを正式に発表しました。そう、まるで娘の
証言を黙殺するかの様だね。」

そこまで一気に話した見荻野が土山老人の横顔を僅かに見た。相
手は冷静な表情を崩していなかったが、こめかみの部分が僅かにけ
いれんしていた。

「娘はそれを恋人の男に相談しました。その後はマスコミにも接触した様子があります。ですが最終的には彼女の主張は誰からも受け入れられず、娘は四十九日の法要の後、周囲の人間全てに別れを告げ、そのまま姿を消しました。行き先は分かっています。」

「……………」

「本庁に残っていた記録は、もちろん自殺と断定したものです。汐見亜矢の証言は記録されていませんでした。土山さん。教えていただけませんか？　やはり捜査に政治的な圧力が加えられたのですか？」

「…確か、見荻野と言ったな、年は幾つだ？」

「？　三十六歳ですが。」

「まだ未来にやりたい事がたくさんある年齢だな。生きてる内に営業運転のＪＲリニアモーターカーにだって乗れるかも知れない。うらやましい事だが、若いだけに見えないものも多い様だ。」

「……………」

「盆栽いじりと、正月にお年玉目当てにやってくる孫の顔を見るのだけが今の俺の楽しみなんだ。細々と暮らしている老人の平和を乱すのは止めて貰えないか？」

「三人死んでるんです…いや、汐見和宏を加えれば四人。それが全て三年前に起こったこの事件が基点となっている。何とも思わないのですか？」

「思わんね。外国で見知らぬ連中が一〇〇万人餓死したという報道と、自分は今夜何を食べるかという問題のどちらが重要かと問われて、前者の方が重要だと言い切れる連中を、俺は心底軽蔑しているんだ。」

「死んだのは見知らぬ連中ではなく、貴方が担当した事件の関係者ですよ。」

「帰ってくれ。もう話す事は無い。」

優美な盆栽の群れに彩られた庭に、沈黙のベールが舞い降りた。僅かの間があつて後、見荻野は小さく一礼してその場を立ち去り、

近隣の駐車場に停めてあつた覆面パトカーに乗り込んだ。大きなため息を突いた見荻野は、渋面をつくりながら独り言をつぶやいた。
「こりゃ、難物だな。何しろ手の内は全部知られている。果たして陥落するかどうか…」

携帯電話が鳴ったのはその時だった。多田倉という発信者名が液晶窓に表示されていた。

「もしもし…左菜海の奥さんに事情聴取が出来たのか。で、どうだった？……ふたつの事件の核心と考える証言が得られた？」

第十五話

「警視庁の多田倉です。この事件の捜査を担当しています。」

自己紹介をしながら、多田倉は目の前でベッドに腰掛けている、パジャマにサマー・カーディガンを羽織った若い女性に見入っていた。何ていい女だろう。写真で見た姿とは次元が違うし、事件現場ではほとんど分からなかったが、こうやって落ち着きを取り戻して髪を整えた姿は、今まで自分が見た全ての女性を凌駕する程美しい。こりゃ、左菜海でなくても多くの男が夢中になるだろうな。多田倉はそう思わずにいらなかった。

「ご主人の事はさぞかしショックだと思いますが、我々の立場としては、事件の真相を究明しなければなりません。あの時一体何が起こったのか、お教え頂けませんか？」

緑がかった黒真珠の様な輝きを湛えた両の瞳で見つめられながら、多田倉は心の奥底で理性を保ちつつ、伝えなければならぬ事を伝えた。左菜海怜奈は小さく頷き、おそろおそろといった口調で経過を語り始めた。

「…左菜海と殺しあつた男は、甲田麻砂鬼と言います…左菜海とは学生時代からの友人で…強盗の仲間でもあります…」

「…強盗…」

「本当に申し訳ありませんでした。緋賀を殺した時にあたしが左菜海を諫めていたら、少なくとも昨日の事は避けられたかも知れないのに…」

「緋賀を殺した…？ 緋賀利康の事ですか？ 左菜海蓮司が緋賀利康を殺したんですか？」

「……………」

「貴女は、それを知っていたんですか？ 知っていて黙っていたんですか？」

「はい。お詫びの言葉もありません。でもまさか、こんな事になる

なんて……」

一度深呼吸をしてから、左菜海怜奈は再び話を続けた。

「一ヶ月ほど前の事でした。買い物から戻ったわたしは、顔面蒼白で応接間に座り込んでいる左菜海を見つけました。彼の目の前には、首を絞めて殺されている男がいました。それは緋賀利康という男で、半年ほど前から何度か家を訪ねて来ていた男です。左菜海は最初あたしに、緋賀を友人だと紹介しましたが、二人の間に変な空気が漂っていたのを感じていました。」

「半年ほど前ですか……」

見荻野からの情報を頭の中で照合しながら、多田倉は小さく頷いた。

「緋賀を絞め殺した様子の左菜海はこういいました。この男は俺を恐喝しに来ていたんだ、と。」

「恐喝？」

「はい……左菜海の話では、三年前、自分と緋賀そしてもう一人の仲間と共に強盗に及んだとの事でした……その時、左菜海はある電気工事会社に務めていたそうです。そして汐見ホールディングスという会社に仕事で頻繁に出入りしていました。この会社の社長は左菜海と同郷で、事のほか目をかけてくれていたそうです。そのため電気工事などはすべて左菜海を指名した形で発注していた様です。ところが親しくしているうちに、左菜海は汐見ホールディングスの裏の顔を知ってしまいました。金権政治家と癒着し、影で違法な政治献金が続けている、という事を。」

「……………」

「しかも、そのお金は銀行に置いておくと監査の段階で発覚してしまうので、常に億という金額を自宅の金庫に用意している……それを知った左菜海は、強盗に押し入ってそのお金を横取りしようと考えました。性質上、警察にも届ける事が出来ないだろうから必ずうまく行く……しかしどう計画を立てても一人では無理だと判断した左菜海は、高校時代の友人だった二人に話を持ちかけ、共犯者に引き入

れたのです。」

「さっきの説明では一人は緋賀ですね。そしてもう一人が、最初に言った通り……」

「はい、甲田麻砂鬼です。当時は三人とも不況で金回りが悪く、なんとかしようと思っていた様で、左菜海の提案は緋賀と甲田にとつて願っても無いチャンスだったそうです。汐見社長を会社の駐車場で待ち伏せ、二人がかりで社長を押さえつけて車に乗せ、そのまま社長の自宅に乗り付けて金庫を開けさせました。中には二億円近い現金が入っていたそうです。ところが、その現金を見て三人とも気が緩んだ瞬間、汐見社長は彼らの手を振りほどき、逃げようとしたのだそうです。慌てた三人はなんとか押さえ込もうとしましたが、バルコニーに出て大声を出そうとしたので、それをやめさせようと左菜海が突き落とした様です。」

「……社長は投身自殺したと思われていましたが、それが真相という訳ですね。」

「わたしが聞いた限りではその様です。予定外の殺人が発生したものの、計画はそのまま続行し、三人は現金を奪った後の金庫を元通りに閉め、玄関を出た後に覆面や手袋も外して何食わぬ顔で逃げ出し、事件の動向を見守りました。ところが警察は汐見社長が自殺したと発表、三人が盗んだお金については一切言及しませんでした。彼らは狂喜しつつも、おそらくは裏金を受け取っている政治家が警察に圧力をかけ、事件そのものをうやむやにさせたのかも知れないと考えたそうです。」

「……………」

返答に窮した多田倉を他所に、左菜海怜奈はさらに話を続けた。

「もしそうだとすれば、これ以上は追いかけられる心配は無いものの、ある意味でもっと恐ろしい政治家という存在を敵にまわした可能性もあるので、ほとぼりがさめるまでは会わない様にしようと約束し、奪ったお金を山分けにして別れたそうです。それから半年ほどして、どうやら自分の周囲に不穏な動きが無いと思った左菜海は、

奪ったお金を元に、汐見ホールディングスに出入りした事で多少覚えていたデイ・トレーディングを始めたそうですが、これが思ったよりもうまく行き、序々に軌道に乗っていきました。あたしが左菜海と出会ったのはその頃でした。」

「その様ですね。なんでも、かなり熱心なプロポーズを受けたとか……」

「……ええ。最初は迷っていましたが、あたしも少しずつ左菜海の情熱に惹かれて行きました。結婚後、左菜海はさらに仕事にまい新し、あたしも僅かながら事務などを手助けしました。この時は物心両面が満たされていて、本当に幸せでした。ところが半年前、あたしたちの前に緋賀利康と甲田麻砂鬼が現れてから事態は一変しました。左菜海が経済的に成功した事を知った彼らは、汐見和宏の事をバラされたくなければ、今後は自分に売り上げの一部を寄こせと言つて来たそうです。以前よりも遥かに護るべきものが増えた左菜海は、仕方なくその要求に応じ続けました。」

「恐喝というのはそういう事ですか。」

「はい、甲田はそれだけでした。」

「？」

「左菜海が緋賀を絞殺した時、左菜海はわたしに全てを打ち明け、さらにこう言いました。緋賀が図に乗って、絶対に受け入れられない要求をしてきた。だから殺した。最初は何の事か分からなかったのですが、よくよく聞いたら、緋賀の新たな要求とは……」

左菜海怜奈はそう言いながら、屈辱と侮蔑をかみしめる様な表情を浮かべ、両腕で胸を隠す仕草をした。それが何を意味するのか気が付いた多田倉は、自分が左菜海怜奈に感じた思いと重なる気がして、不快な自己嫌悪にさいなまれた。

「おっしゃりたい事は分かりました。それで、緋賀を絞殺した後はどうしたのですか？」

「それまでの事はともかく、左菜海が緋賀を殺したのは、結果的にはあたしのためです。彼を責める訳にはいかない……あたしはそう考

えたし、左菜海も自首する気がない様子でした。あたし達は相談の末、緋賀の死体を奥多摩の山中に埋めて、何も知らないふりをする事に決めました。」

「貴女は自分が何をやったのか分かっているんですか。少なくとも死体遺棄：下手をすれば殺人幫助に問われるかも知れないんですよ。」

「よく分かっています。でも左菜海を見捨てる訳には行かなかった……」

震える声でそう答える左菜海怜奈の前に、多田倉は無言で顔をしかめた。

「ところがそれから何日かして、左菜海に一通の手紙が届きました。」

「手紙？」

「はい。手紙といっても、うちのポストに直接放り込んだものの様でした。差出人が書いてなかったので誰の手紙かは分かりませんが、その手紙を読んだ直後から、左菜海の様子が明らかにおかしくなりました。何かを恐れている様な、悩んでいる様な……そして手紙が届いた翌日、自分の目を疑う様なニュースがテレビや新聞で流れ始めました。奥多摩に埋めた筈の緋賀の首だけが、よりによって緋賀や左菜海の故郷である銚子の林の中で発見された……と。あたしは訳がわからず、何が起こっているのかを左菜海に問いました。しかし彼は何も言いませんでした。」

「その報道の後に甲田麻砂鬼が来た訳ですか。」

「はい。電話がかかってきて……対応した左菜海によると、甲田は電話の向こうでひどく恐れた様子で、とにかくこちらに来て今後の事を相談したい、と言った様です。甲田の正体は、左菜海が緋賀を殺した時点で聞いていましたから、甲田と会うのはやめた方がいいと言ったのですが、左菜海はあたしの言う事を聞き入れず、どうしても会わなければならない用があると言って……甲田がやって来ると、あたしは命じられた通り応接間に案内して……その後の事はよく覚え

ていません。頭の中が真っ白になって……気が付いたらこの病室にいました。二人が死んだという事も、ついさっき教わったばかりです。

「重苦しい沈黙が病室を支配した。多田倉はメモを閉じ、椅子から立ち上がった。」

「今日はここまでにしましょう。明日、またお話を聞かせて頂く事になると思います。」

一呼吸するだけの間があつて後、多田倉は左菜海怜奈に対してさらにこう告げた。

「貴女の行為に対して司法が最終的にどう判断するかは断定出来ません。ただ、お話を伺った限りでは情状酌量の余地はあると思います。」

その言葉を聞いた左菜海怜奈は多田倉に深々と頭を下げた。落ちて着いた表情で一礼をかえした多田倉は、病室から出て本庁への帰路についた。廊下を歩く自分の歩調が変に軽やかな事を、多田倉本人は気づいていなかった。

第十六話

その夜の合同捜査会議では、七尾一郎と左菜海怜奈の証言、及びそれに関連した事項が主な議題となった。出席していた本部長は、汐見ホールディングスの政治献金に対する点が挙げられた時に微かに眉間にしわを寄せたが、それ以外はおおむね表情を変えず、多田倉や鑑識係の報告に耳を傾けていた。

「まず、左菜海怜奈の証言に基づいて搜索した奥多摩の山中で、ついさきほど首の無い死体が発見されたと報告がありました。DNA鑑定はこれからですが、外見上は首と同じく成人男子の様です。次に、左菜海邸の書斎で発見された『手紙』は、用紙も印字の状態も七尾一郎に宛てられたものと一致しました。文面はこうです…あなたが緋賀を殺した証拠を握っている。暴露されたくなければ、甲田麻砂鬼を殺せ。そうすればあなたは見逃してやろう。信じるか信じないかはあなたの自由だが、これが嘘や冗談で無い証拠は、明日からでもテレビや新聞で嫌という程流れるから、楽しみに待っている…」

「左菜海が甲田を殺そうとした理由はそれか。とすると、甲田も似た様な理由で左菜海を殺しに来たのかも知れないな。甲田には手紙は届いていないのか？」

「家の中をくまなく搜索しましたが、発見は出来ませんでした。」

「手紙の主に関しては何かつかめたか？」

「残念ながら、まだ何も。ただ、左菜海宛ての手紙には、七尾のものとは検出されていません。一方、七尾が受け取った手紙や紙袋を再鑑定しましたが、左菜海のものとは見つかりませんでした。」

多田倉の報告に続いて、見荻野がここまでの捜査結果を総括した。「これまでの捜査結果から、この一連の事件は全て汐見ホールディングスの社長の死が発端になっていると考えられます。七尾や左菜海怜奈の証言から、自殺と断定された汐見社長の死が、実は左菜海

達三人が起こした強盗殺人によるものであると分かっており、その三人が次々と死んでいるんです。もはや無視出来る状況では無いと考えます。」

「だがどちらも又聞きだな。物的証拠に基づいている訳では無い。それに当事者が全員死んでしまった今となつては、汐見ホールディングスの件も再捜査は難しい。社長の自宅も既に他者の手に渡っているのだから、現場検証をやりなおしても何も出ないだろう。」

本部長の見解を聞いた見荻野が、机の下で拳を握り締めた。

「それよりも、今は手紙を書いた人物の特定と逮捕を優先するべきだ。直ちに捜査方針の見直しにかかれ。では、解散。」

会議が終了した後、見荻野と多田倉はロビーのソファに座り、僅かな時間ながら休憩をとる事となった。

「戦わなければならぬ相手が内部にもいるというのは厄介ですね。」

自動販売機で買った缶コーヒーを見つめながら、苦笑の面持ちで多田倉がそうつぶやいたが、見荻野はそれには明確に返答せず、小さくかぶりをふっただけだった。

「いずれにせよ、捜査方針を根本から見直す必要は確かにありそうだ。このままでは手紙の主の身柄拘束など全くおぼつかない。少しでも手がかりを探さないと。」

「具体的にはどうするんですか？」

「まず、汐見亜矢を探し出して事情聴取を行う。さつきも言った通り、この状況ではどう考えても無関係とは思えないからな。明日、もう一度北南大学のあの三人に会ってみる。ある程度の事情を打ち明け、汐見亜矢が立ち回りそうな場所をひとつでも多く教えてもらうつもりだ。それとあの三人以外に汐見亜矢と交遊があつた者が見つかれば……」

「高校時代の友人とか？」

「それもあるな……そういえば七尾は高校時代から汐見亜矢と交際していたそうだから、汐見の高校時代の友人関係も知っている筈だ。」

今のうちに連絡して用意しておいて貰うか…」

携帯電話を取り出した見荻野は、メモリーの『な』行から『七尾一朗』を検索しコールを開始した。

「…ん？」

見荻野の顔に不審の色が浮かんだ。

「どうかしましたか？」

「いや、呼び出しはしているんだが、出ないんだ。」

「今すぐ連絡がつかなくて良い用件なら、メールしておけば後で読むんじゃないませんか？」

「昼間の修羅場の一件もあるしな。出来れば様子を聞いておきたい。」

「

「修羅場？」

「いや、気にしないでいい…やっぱりダメだな。小出貴美恵の方にかけてみるか…」

しばしの沈黙の後、見荻野は再びかぶりをふった。

「こっちも出ないな。二人して呼び出しに気が付かない様な状態なのか？」

「そうかも知れませんよ。今回の事で七尾一朗が落ち込んでいて、小出貴美恵が『元気だしてよ、あたしが慰めてア・ゲル』なんて言って、そのままベッドイン！」

「…楽しそうだな、多田倉。何か最近いい事でもあったのか？」

「い、いえ…そういう訳ではありませんが…」

見荻野に指摘された多田倉は、今日事情聴取を行った相手の顔を思い浮かべながらも、言葉と身振りで慌てて打ち消した。

「…ん？」

見荻野の手にあった携帯電話が鳴り始めたのはその時だった。部下の一人である一枝からの着信である事を表示窓が知らせていた。

「もしもし…土山さんが死んだ？」

見荻野がつぶやいた言葉に、多田倉も瞬時にその重要性を理解した。

「土山元警部補が？」

思わず問いかけた多田倉に手のひらを向けて制した見荻野は、電話から聞こえてくる報告に何度か相槌をうち、愕然とした表情で電話を切った。

「近所の人が、庭先で倒れている土山さんを発見した。」

「死因は何ですか？」

「まだ分からないらしい。とにかくすぐに行ってみる。後は頼んだぞ。」

多田倉への返答ももどかしそうに、見荻野は駐車場に向かって駆け出した。その後ろ姿を見送りながら、多田倉は首をかしげた。

「…一体どういう事なんだ…」

「多田倉さん、こちらでしたか。」

背後から呼びかける声に、多田倉は困惑した表情のまま振り向いた。本庁でも凄腕と評判の鑑識である猪野という男がそこに立っていた。

「お取り込み中のところを申し訳ありませんが、実はすぐにでもお知らせしなければならぬ事実が判明しました。一緒に来てくれませんか？」

第十七話

「左菜海蓮司と甲田麻砂鬼が殺し合った現場で発見された凶器ですが、詳しく調べた結果、不審な点が浮かんで来ました。」

テーブルに置かれた二本の出刃包丁を指差しながら、猪野は多田倉に説明を始めた。

「まず、甲田麻砂鬼が使ったと思われるこちらの包丁の柄の部分から、甲田麻砂鬼自身の指紋と掌文が検出されました。ところが、その指紋と掌文の付き方が不自然なのです。」

「不自然？」

「包丁を握って人を襲う場合、かなり強い力で握り締めなければ落したり刃先がブレたりします。今回の場合はかなり長い間争いが続き、お互いを何度も刺したり斬り裂いたりしていますから、その間は全力で握り締めているでしょうし、場合によっては握りなおす筈です。事実、左菜海蓮司が使ったこちらの包丁は、そういう握り方をしていた事を示す指紋が検出されました。ところが、甲田麻砂鬼が使ったと思われる方の包丁は、一度だけ軽く握った程度の指紋しか検出されませんでした。」

「…となると、どういうケースが考えられる？」

「考えられるケースは、甲田が死ぬか包丁を落した後、誰かがそれを手にとったというものです。血のりは拭き取られていませんから、誰かが自分の指紋を付けない様に手袋をするか、或いは紙か布で柄を包んで握ったのでしょうか。甲田が強く握っていた時の指紋はそれで消えたと考えられます。そして、その痕跡を消すためにもう一度甲田に握らせた。しかしその時の甲田には強く握り締める様な握力はなく、申し訳程度の指紋しか付かなかった。」

「ちよつと待ってください。」

多田倉が微かに感情を高ぶらせた口調で説明に割って入った。

「あの場面で、あの部屋には左菜海夫妻と甲田しかいなかった。一

体だれがそんな事をしたというんだ？」

「甲田でなければ、左菜海夫妻のどちらかという事になるでしょうね。しかもお互いを傷つけあった以上、甲田が死んだか動けなくなつた時点で、左菜海蓮司も相当ダメージを受けていると考えるのが筋です。となれば……」

「いや、そんな筈は無い。我々が現場に到着した時、あの奥さんは血まみれの部屋の隅で、警察に電話した携帯を握り締めたまま、うずくまって震えているだけだった。ろくに言葉も発せられない状態だったし、他に何かした様な形跡は……」

「そういう話は後にして、鑑定結果の報告を続けさせてもらえませんか？」

「まだ何かあるのか？」

「はい、もうひとつおかしな点があります。」

猪野はそう言いながら、近くの事務机に備え付けられたパソコンを操作して何枚かの画像を表示させた。それは左菜海と甲田の死体を写した写真で、刃物で傷つけられた跡が何箇所か見て取れた。

「殺しあった両者は、お互い動き回りながら……つまり相手の攻撃を避けながらも、避けきれずに傷つき、最後はお互い出血多量で倒れこんだ事が分かっています。ところが……」

猪野が再びパソコンを操作すると、その画像の内一枚がクロージアップされた。首から肩にかけてのアップで、大きな傷口が開いている事が多田倉にも視認できた。

「この様に、左菜海の頸動脈付近には、まるで狙いすまして全力で突き刺した様な深い傷跡があり、これが直接の死因だと判明しました。しかし現場の状況から考えて、その時点でそんな風にとどめをさす余力が甲田に残っていたとは考えられませんし、仮にそんな力が残っていたとしたら、先ほど言った指紋や掌文の付き方と矛盾が生じます。」

「……甲田麻砂鬼以外の誰かが、甲田の包丁を使って左菜海蓮司にとどめをさした。そして他に誰も現場にいなかった以上、左菜海怜奈

がそれをやった事になる……こう言いたい訳か？」

「それ以外に、この事実を説明する方法がありません。」

その一時間後：見荻野は、つい数刻前にも訪ねた日本家屋の庭に立っていた。ただし先ほどはその庭で整然と並んでいた手入れの良い盆栽の数々が、その所有者が倒れこんだ事で棚から落下し、無惨な姿で散乱していた。

「発見者は近所に住む盆栽仲間の老人です。今夜は近くの公民館で盆栽クラブの会合があったそうですが、幹部会員の一人である土山さんが珍しく欠席したので、報告がてら世間話でもしようと訪ねたところ、庭先で倒れている土山さんを見つけたそうです。」

先行して到着していた一枝の説明に続き、鑑識係が死体について所見を述べ始めた。

「解剖が済むまではつきりした事はいえませんが、おおよそ午後五時に死亡したと思います。」

「……俺と会ってから約二時間後くらいだな……」

今回の一連の事件の証人のひとりであり、性格は合いそうに無いものの仕事と人生の先輩でもある人物の死を目の前にして、見荻野はかぶりをふる事しか出来なかった。

「死因は？」

「それが、どうやら感電死の様です。」

「感電死？」

「ええ、首の後ろに、感電した様なヤケドの跡があります。考えられる原因としては、例えば落雷などがあります。」

「ところが気象台に問い合わせたところ、この付近で今日の午後以降に雷雲が発生した記録は無いそうです。」

鑑識の説明に一枝が情報を補足した。

「もし落雷ではないのなら、人工的な電気に触れた可能性があります……触れたというより、死体の様子からして、首にそういうものを押し当てられたと考えた方が妥当でしょう。」

「スタンガンか？」

「いえ、スタンガンで感電死させるのはほぼ不可能です。それにこんなヤケドの傷が付くというのもちょっと考えられません。電流が流れる時間と量を改造すれば別ですが。」

「スタンガンの改造……」

鑑識の説明を聞いていた見荻野の脳裏に、ある連想が浮かんだ。

「……あのビーコンも自作だった。あれが作れるのなら、スタンガンの改造も決して不可能じゃない……そういう事にならないか？」

そのつぶやきは、目の前の一枝に対するものというより自問自答の要素が強かった。事情を把握している一枝は、その発言に込められた意味を理解した様子だったが、返答する前に別の声が割り込んできた。

「すみません、ちょっとこれを見て下さい。」

一旦死体のところに戻っていた鑑識が、見荻野に再び近づき、指紋を付けないための白い手袋で持った一枚の紙切れを差し出した。

「これは？」

「被害者の服のポケットから今見つかったのですが、どうも内容が……」

同じく白い手袋をつけた見荻野が、怪訝そうな面持ちで紙切れを受け取り、それがあのP P C用紙と見慣れた印字である事に気が付いた。

「やっぱり同じ差出人か……これは……」

「なんですか？」

「これを見る。」

メモを一枝に渡した見荻野は、携帯電話を取り出してどこかに連絡しようとした。一枝が受け取ったそのメモには人名が五つ書かれており、その内四番目までにV型のチェックが付けられていた。

「一、緋賀利康。二、甲田麻砂鬼。三、左菜海蓮司。四、土山支頭夫。五、七尾一朗！」

「……だめだ。七尾のやつ、やっぱり出ない。こっちは……」

「七尾も殺されるというんですか？ でも何故？」

「分からない…やはり小出貴美恵も同じだ。呼び出してはいるんだが電話に出ない…待てよ。」

ふと何かを思い出した様子の見荻野は、別の電話番号にコールした。

「……もしもし、高宮浩子さん？」

『あ、こんばんは。また何か質問ですか？』

「実は、さっきから七尾君や小出さんとまったく連絡が取れないんですが…」

見荻野が手短かに事情を説明すると、高宮浩子の声にも緊迫した要素が加わった。

『あたし、見荻野さんが帰った後、とにかく話し合いなさいって言って、そのまま二人きりにしてすぐ帰ったんですよ。だからあの後どうなったか分からないんです。電話もメールも来ないから、もしかしたらうまく行って、あの部屋で二人きりの世界に浸かっていると思ってたんですけど…』

「そうですか…わかりました。これから七尾君のアパートに行ってみます。」

見荻野は、隣にいる一枝にも聞こえる様にそう告げ、電話を切った。

「という訳だ。尾いてきてくれ。」

「はい…それと提案があるのですが。」

「何だ？」

「相手が出ないとしても、呼び出しはしている訳ですよ。とすると、相手の携帯は、電源そのものはオンになっています。」

「ああ、そうだな。でもそれが…」

返事の途中で、見荻野も何かに気がついた表情に変わった。

「…微弱電波か。」

第十八話

針金入りの大きなガラスには、室内から見ると裏返し状態で『テナント募集』と書かれた紙が貼られていた。事務所や店舗にしては幾分小さな二十畳ほどの部屋には、今現在三人の人間が入り込んでいたが、隣接した幹線道路の騒音とヘッドライトによる光の乱舞は、本来の照明が点いていない室内に誰かがいる様子を打ち消してしまっていた。

「セッティング完了。これであたしがあのドアから出るとシステムが起動する。そして次に誰かがドアを開けた時、引火用のスイッチが起動して電流が走り、この容器に入ったガソリンに火花が散る。さぞ盛大に燃える事でしょうね。」

部屋の中央に置かれたポリエチレン容器に取り付けられた発火装置のボタンを押しながら、その女は薄笑いを浮かべた。ポリエチレン容器から延びた一本のコードが、玄関のドアに取り付けられたスイッチに接続されていた。その細工を指差しながら、女は得意げにその仕掛けを説明した。

「これがあなた達の携帯の電源を消さない理由。微弱電波が、あの目障りな警察を釣る餌に使えるからよ。この仕掛けによって彼らがあなた達の命を奪い、同時に彼ら自身の命も奪うという訳。大したものでしょう。この機械も、貴方に渡したビーコンも、そして貴方達をここに連れてくる時に使ったスタンガンの改良も、全部あたし手がけたのよ。元々は左菜海の家に盗聴器や監視カメラをセットするために学んだ技術だけど、思ったよりも役に立ったわ。」

「亜矢、もうやめろ。これ以上罪を重ねてどうするんだ。」

既に拘束されてはいたが、まだ口までは塞がれていなかった七尾一郎は、務めて冷静な口調で相手の行為を制する言葉を発した。だが汐見亜矢は、やめるところか七尾一郎の言葉に傷ついた様子を表した。

「気やすく呼ぶなと言った筈よ。まだあたしが自分の女だとも思ってるの？」

肉食獣の咆哮の様な声で怒鳴りちらした汐見亜矢の目に、さらに猟奇を思わせる色が浮かんだ。

「なんだつたら、今すぐ殺す事だつて出来るのよ。でも、あなたから受けた裏切りの傷は、土山みたいにスタンガンの一撃で殺して癒せるほど浅くは無い。悩み、傷つき、恥をかき、そして生きながら焼かれて、苦しんだあげく死んで貰わなければね。だからこそ、あんな危ない橋を渡つてまであなたを銚子までおびき寄せたのよ。今さら楽に死なせはしないわ。」

「……………」

「それに、犯罪は警察が認めて初めて犯罪になる。認めなければ犯罪も犯罪者も存在しない。かつてあたしの父親を殺しながら罪に問われなかった左菜海蓮司たちの様にね。」

冷酷さと残忍さに彩られたその瞳に、怒りと嘲笑の色が混入した。「ただし、もうこれで終わり。緋賀も左菜海も甲田も土山も死んだ。後は貴方達を片付けてから、怜奈と新しい生活を始めるわ。」

「怜奈：左菜海怜奈の事か。昼間、見荻野さんが言っていた…」

「夫が死んだから旧姓の小野に戻る事になるけど、その通りよ。彼女があたしの大事なパートナー。」

「一体どういう事だ？」

「そうね。最後だし、教えてあげるわ。あたしがあなたの前から消えた後、何をしてきたか…」

汐見亜矢は腕を組み、能面のような表情で語り始めた。七尾一朗も小出貴美恵も、その声を耳にした瞬間、何か不快なものに接した様に眉をひそめた。

「父親の遺産を全部売却して金に換えたあたしの進む道は、その金を使って復讐する事だけだった。ただ、左菜海の事だけは分かっていたけど、他の二人が誰なのか分からない。一人だけを殺してもあたしの気はおさまらないから、まず左菜海を徹底的にマークし、何

とか他の二人の正体を突き止めようと考えた。自分でも調べたし探偵会社にも随分調査費用を使ったわ。でもさすがに身を潜めているだけあって、これという特定は出来ずにいた…そんなある日、左菜海がある女性と付き合いだした。」

「それが小野怜奈か。」

「そう…もつとも付き合い出したと言っても、事の始めから彼らを観察していたあたしには、その本当の關係が克明に見て取れたわ。」

「本当の關係？」

「怜奈が左菜海と付き合ったのは、怜奈の本意では無いのよ…もつと分かり易く言えば、最初の時『合意』ではなかったの。」

「！」

「あなた達は見た事が無いでしょうけど、怜奈の美しさは女のあたしが見ても惚れ惚れする程のものなの。金が欲しければ盗んでも手に入れる様な左菜海にとつて、怜奈はどんな手段を使っても手に入れたい存在だった。そしてそれをネタに左菜海は怜奈に度々關係を迫り、とうとう結婚にこぎつけたという訳よ。」

「ひどい…」

それまで黙って聞いていた小出貴美恵が、憤激の声をあげた。

「ふうん、なかなか話が分かる娘ね。そう思うでしょ。まあ男なんてみんな…」

「違う！」

「え？」

「それを傍で見ているながら、あなたは助けようとしなかった。同じ女なら、それがどれほどつらくて苦しい事が分かる筈でしょ。それなのに…あなたが他人を非難する資格の無い人間だという事が、よく分かったわ。」

僅かな時間、沈黙が部屋を支配した後、不意にけたたましい笑い声が発せられた。

「言ってくれるじゃない。さすが世の中の闇を覗いた経験の無いお嬢ちゃんだけの事はあるわね。」

「……く」

「話は戻るけど、とにかくこれは利用出来ると思い、あたしは近所の住人のひとりとして彼女に接近した。不本意な結婚で落ち込んでいた怜奈を手なずける事など簡単だったわ。やがてあたしは彼女から結婚生活の真相を聞かされ…本当は知っていたけど、知らなかったふりをして彼女に同情するそぶりをみせ、彼女の信賴を得た。怜奈が左菜海にこれ以上無い怒りと憎しみを持つ様に煽ってあげるとやがて怜奈は左菜海を殺したいと考える様になった。こうして彼女を協力者に仕立て上げる事が出来たのよ。」

得意そうな口調で語り続ける汐見亜矢に対し、二人は苦虫を噛み潰した様な表情しか出来なかった。

「機会を伺っている内に、左菜海が事業に成功し、それにつられて遂に緋賀と甲田が左菜海の家に見れた。二人の素性と生活状況を調べあげたあたしは、その状況を利用する計画を思いついたのよ。」

「計画？」

「まず怜奈に緋賀を誘惑させた。夫が構ってくれずに身をもてあました女、というありがちなシチュエーションでね。まあ、ありがちでも何でも、あの怜奈に迫られて断る男なんていないわよ。案の定、緋賀は怜奈に夢中になってしまった。そして左菜海の留守を狙って家に誘い込み、油断したところを二人がかりで捕まえ、真相を吐かせたという訳。三人があたしの父の金と命を奪った経緯の全ては、この時に知ったのよ…まあ大体は予想通りだったけど、それでも緋賀を絞め殺す手に、より大きな力が入ったのは、その話が原因だった。緋賀を殺した後、打ち合わせ通りあたしは左菜海の家から退去した。家に帰って来た左菜海には、襲われそうになったので夢中で絞め殺したと怜奈に嘘をつかせたわ。同類の左菜海は無条件で信じたそうよ。」

「……」

「左菜海が警察に通報せずに、緋賀の死体を処分してすべてを隠そうとしたのも予想通りだった。『お前は何も心配しなくていい、俺

が全て引き受けてやる。俺が全力を挙げてお前を護ってやる。』なんて言ったものだから、怜奈は笑いをこらえるのが大変だったそうよ。でもまあ、これなら自分がやった訳でもない緋賀殺しの隠蔽のために甲田を殺すだろう…と思って計画を推し進めたんだけどね。まったく男つてのはどいつもこいつも…」

せせら笑いの後、汐見亜矢は腕を組みなおしながら話を続けた。
「死体が奥多摩に埋められた後、場所の連絡を受けたあたしはそこで死体を掘り返し、首を斬りおとしてからあらためて胴体を埋め、その首をクーラーボックスに入れて銚子まで運び、貴方に手紙とアイコンを渡して見つけさせたという訳。」

「俺が見つけられなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「そんな筈ないでしょ。こういう謎解きはあなたが最も得意とする分野だったもの。まあ、万一ダメだった場合はあたし自身が警察に通報するつもりだったけど、結果的には見事に劇的な演出を施してくれた。さすが期待されてる推理作家の先生だけの事はあるわね。」

「……………」

「あのニュースを見たあいつらはさぞ驚いたでしょうよ。あらかじめ手紙を受け取っていた左菜海はもちろんの事、強盗の仲間である緋賀の首が突然自分達の故郷で見つかったなんていうニュースに接した甲田も同じ。嫌でも耳目に入ってくる大騒動の様子に震え上がった筈。頃合いを見計らって、あたしは甲田に電話でこう伝えたの。自分は全ての事情を知っている人間だ。左菜海が過去の清算の為に緋賀と貴方を殺そうとしている。このニュースも貴方の動揺を誘い、家に招きいれて殺そうとする計画の一環だ。助かる方法はただひとつ、貴方が先に左菜海を殺す事だけだ、とね…」

「そうやって殺し合わせたのか。」

「ええそうよ。もつとも後で怜奈に聞いたんだけど、争いが終わった後も左菜海の方は死ななかったから、怜奈自身がとどめをさしたらしいわ。それまでの恨みを込めて、思い切り刺し殺してやった…と大喜びしていたわね。」

「……………」

「やがて警察が来て怜奈を保護した。用意していたシナリオ通りに証言したはずだから、仮に実刑になったとしても服役期間はたかが知れてるし、さらにその証言が報道されれば『汐見和宏は自殺した』という警察の発表が捏造だったと世間に知らしめる事が出来る。一方あたしは、この一連の事件の原因となった土山とあたしを裏切ったあなたを『整理』して、全てを『清算』する事になるわ。」

そこまで話し終えた汐見亜矢は、タオルと布テープを用意しながら、もう一度二人に向き直った。

「さて、これからあなた達の口を塞ぐ事になるけど、最後に何か言い残す事はある？」

「…ではひとつだけ。小出貴美恵だけは助けてやってくれないか？」
その発言を耳にした二人の女性が、それぞれ別の感慨を顔に表した。

「俺はともかく、彼女は何の関係も無いはずだ。ここで死ななければならぬ理由はどこにも無い。」

「冗談でしょ。今のあたしの話を聞いたのだから、それだけで十分理由になるわ。」

「七尾さん、もう結構です。」

いつもはアニメ声と評される小出貴美恵にしては珍しく落ち着きはらった声が、他の二人に軽い驚愕をもたらした。

「こんな下種に頭を下げてまで生きていたいとは思いません。まして七尾さんが死んであたしだけ生き残るつもりもありません。」

「下種とはよく言ったわね。あんたと一緒に死のうとしているその男が、あの頃のあたしにどれほど下種な言葉を投げつけたか知りもしないで。」

「聞かなくても分かるわ。今あたしの頭に浮かんでいるあなたへの評価が、そのまま転用出来るはずだから。」

「偉そうに言わないで。あんたにあたしの何が分かるっていうのよ。あんたに、この男の何が分かるっていうのよ！」

「分かるわ。今のあたしは、あの頃のあなたよりずっと七尾さんを理解している。今のあたしは、あの頃のあなたよりずっと七尾さんを愛している！」

一台の大型トラックが隣接した幹線道路を通過するだけの時間、室内が凍りついた。やがて汐見亜矢が苦笑しながらかぶりをふり、口を開いた。

「これ以上不毛な会話を続ける必要は無いわね。どちらもせいぜい苦しみながら仲良く焼け死んでちょうだい。そんなに愛してるのなら本望でしょう。」

第十九話

窓に写る光の具合が、それまでと異なるゆらぎを見せたのは、汐見亜矢が逃走してかなり経ってからの事だった。あきらかに外で人が動いている事がみて取れ、やがてドアの向こうに誰かが立った様子が感じられた。

（来た…これで終わりか。）

七尾一朗も小出貴美恵も、次に出現する豪炎のシーンを想像して全身を硬直させた。だが、ドアは開かなかった。二人が首をかしげながらも推移を見守っていると、今度は窓ガラスに懐中電灯の光が当てられ始めた。やがてガラスをコツ、コツ、コツ…と叩く音がしたかと思った次の瞬間、ガシャツ、という鈍い音と共にガラスの一部が打ち砕かれ、不規則な形状の穴が穿たれた。その穴から懐中電灯の明かりが室内に投げかけられ、縛り上げられた二人の姿を照らし出した。

「七尾一朗君と小出貴美恵さんだな？」

それが昼間にも耳にした私服警察官の声である事に気づいた二人は、自分達でも驚くほどの勢いで塞がれた口から何とか声を出そうとうめき、さらに首を振って危険である事を伝えようとした。

「やっぱり何か仕掛けがしてあるのか？」

「んん、んん」

二人は可能な限り大きく頷いた。

「そうか。ドアから入らなくて正解だったよ。窓を大きく壊して入っても大丈夫か？」

二人は再び大きく首肯した。

「一枝、本庁に連絡して爆発物処理のチームを呼んでくれ。それとここでドアを見張っていてくれ。くれぐれも開ける事が無い様にな

隣に立っていた部下にそう言いながら、見荻野は手に持った車両

点検キットのスパナで窓ガラスの穴を広げていった。やがて人が通れる程の大きさにまで広げると、見荻野は懐中電灯で足元を照らしながら二人に近づき、口を塞いでいたタオルと布テープを外した。

「…助かりました。」

「いや、無事で何よりだ。それで、君たちを拉致監禁したのは誰なんだ？」

二人の顔に僅かな陰りが差した。

「…汐見亜矢です。」

見荻野もまた複雑そうな面持ちで小さく首肯し、表で待機していた一枝に汐見亜矢の指名手配を要請する様に告げた後、二人の拘束を解き始めた。

「それにしても、罠があるとよく気がつきましたね。」

「いや、それほど難しくは無かったよ。相手がやたらに作戦好きなのは分かっていたからね。その上で、こんなメモを残して君たちを探させるようにしむけているから、何かあるなとは思っていた。」

土山の服から発見された五人の名前が列記されているメモをかざしながら、見荻野はそう説明した。

「君たちの携帯の微弱電波がこの空き家から出ている事はおおよそ見当がついたが、外から様子をうかがっても誰かがいる気配は無い。とすれば君たちが逃げない様に拘束されているとも考えられる。それなのにドアの隙間から覗いたら鍵がかかっている様子が無い。誰かを監禁するのなら鍵ぐらい閉める筈なのに、一体何故だろう…まあ確信があつた訳じゃ無いが、こういう場合は相手の用意してくれた道避けて通る方が生き残れる確率が高いからね。」

七尾一朗と小出貴美恵がようやく拘束から逃れられた頃に、爆発物処理班が到着した。

翌朝、左菜海…既に旧姓の小野に戻る事が決まっていたが…怜奈の病室に担当医と多田倉が揃って顔を出した。担当医は左菜海怜奈に、もう退院しても差し支えない事を告げ、後は警察に任せると

言って多田倉に行動をうながした。

「ご迷惑をおかけします。もし、多田倉さんがおっしゃる様な情状酌量が認められなくても、わたしは自分の罪を悔い、司法の判断に従おうと思います。」

相変わらぬ美しい面立ちに余裕さえ感じられる笑みを浮かべながらそう述べた左菜海怜奈に対し、多田倉は逮捕状をかざしながら、つとめて感情を抑えた表情と声でこう返答した。

「左菜海怜奈。左菜海蓮司並びに緋賀利康の殺人、及び甲田麻砂鬼の殺人幫助容疑で逮捕する。それと汐見亜矢との関係についても事情を聞かせてもらうぞ。」

「……………」

左菜海怜奈は何ら表情を崩さず、僅かな時間の後に小さく頷き、多田倉に連行されて行った。汐見亜矢が都内のビルから飛び降りたのは、その数日後の事だった。

エピソード

汐見亜矢が飛び降り自殺を遂げたビルの屋上には、左菜海怜奈に對して責任をとる、とだけ書かれた遺書が残されており、それ以外の件については何ら記述していなかった。

「あれ程の事やってのけた汐見亜矢にしては、随分あっけなかった様に思うがね。それに、仲間を犯罪者にした事がそれほどシヨックだったというのも、汐見亜矢の人となりになぞらない様な気がするけど。」

本庁の霊安室に一時置かれていた汐見亜矢の死体を見ながら見荻野はそうつぶやいたが、死体の検分のため小出貴美恵と供に出向ってきた七尾一朗の見解は、それとは少し異なっていた。

「亜矢は、左菜海怜奈に對して友情や信頼以上の感情を抱いていた様に思います。」

「……恋愛感情を持っていたというのか？」

「あの時、得意げに今回の一件を説明する亜矢は、話が怜奈の事になると、何かとても嬉しそうな。夢見心地の様な表情を浮かべていました。今にして思えば、俺と亜矢が一番うまく行っていた時に何度か見た顔とちょっと似ていたんですよ。」

隣にいる小出貴美恵の顔に、それまでとは少し異なる真摯な表情が浮かんだ。

「もしそうなら、怜奈を殺人犯にしまった事は亜矢にとって耐え難い苦痛だったかも知れない。それに、怜奈が殺人罪で刑務所に入ったら長く……もしかしたら永久に会う事が出来ない、という苦しさが加わったとしたら……まあ、あくまでも推測ですけど。」

「ところで汐見ホールディングスの件だが、やはり再捜査は難しそうだ。世間は大騒ぎしているが、加害者の三人に加えて土山元警部補まで死んでしまったからな。まあ考えてみれば、汐見亜矢は自分で父親の死の真相を暴く機会を潰した、という見方も出来る……」

七尾一朗の視線に込められた無言の非難が、ひとりの警察官である見荻野に突き刺さった。

「…いや、この言い方は適切ではなかったな。気に触ったのならすまない。」

「…俺も同罪ですから…」

そう言った後、七尾一朗は口を真一文字に結んでうなだれた。見荻野は何も返答する事なく、二人に霊安室から退去する様うながした。

一時間後：庁舎を辞して表通りに出た二人に、うだる様な都心の熱気が襲い掛かった。

「相変わらず暑いな。まあ幾ら文句を言っても夏が終わってくれる訳じゃないけど…」

敢えて軽い口調でそう言った七尾一朗に対し、小出貴美恵はにこやかな表情でうなずいた。

「夏季休暇はまだ半ばですし、気分転換も兼ねてどこかに遊びに行きたいですね。」

「それはいい考えだな。行くならどこがいいと思う？」

「もちろん銚子です。あそこなら泳げるし、魚も美味しいし、それに犬吠駅で食べた焼きたてのぬれ煎餅…今は何よりもあれが食べたいですよ。」

「銚子ねえ…」

「駄目ですか？」

「いやそんな事はないけど、あんな事があつた場所だし、行く先々で思い出して気分転換にならないんじゃない？」

「だから行くんですよ。今度は切符も宿泊クーポンも自分達で買って、わずらわしい用件も抱え込まずに観光だけの目的で、しっかりと遊んではじめをつけて来ましょう。」

「なるほど、そういう考え方もあるか。」

「決まりですね。それじゃさっそくインターネットでホテルを検索

してみます。二名一組、ひとり当たり一泊一万円くらいで探してみますね。」

「あ、ちよつと待ってくれ。『二名一組』で申し込むと一緒に部屋にされ……」

「七尾さん。あたしははじめをつけると言いました。」

「……………」

「あの時言つた通り、あたしは誰にも負けません。そして、貴方を誰にも譲る気はありません。」

その満面の笑みの中に獲物を狙う獵犬の様な表情を見てとつた七尾一朗は、苦笑の面持ちで細かく頷いた。真夏の昼下がりに、背中を冷たいものが通り過ぎた感覚を得た事は、むろん口にはしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3799d/>

しおさいの時刻

2010年10月8日14時06分発行